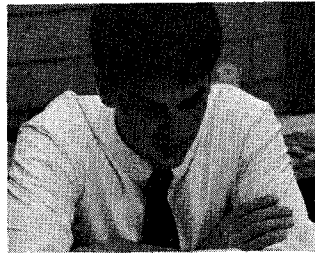


聖徒の道 10 1984





本書は「エンサイン」「ニューエラ」「フレンド」の記事を抜粋した、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スベンサー・W・キンボール
マリオン・G・ロムニー
ゴードン・B・ヒンクレー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
ハワード・W・ハンター
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・バックナー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト
ジェームズ・E・ファウスト
ニール・A・マックスウェル
ラッセル・M・ネルソン
ダリン・H・オークス

顧問

M・ラッセル・バラード
ローレン・C・ダン
レックス・D・ピネガー
チャールズ・A・ディディエ
ジョージ・P・リー

編集長

M・ラッセル・バラード

国際機関誌

編集主幹：

ラリー・A・ヒラー

編集副主幹：

デビッド・ミッチェル

子供の頁編集：

ボニー・ソーンダーズ

レイアウト・デザイン：

マイケル・カワサキ

も く じ

霊的真理を身に受け、実行する……………	マリオン・G・ロムニー……………	1
仲むつまじくあるために……………	C・リチャード・チデスター……………	7
質疑応答／モルモン経と神殿事業……………	モンテ・S・ナイマン……………	14
優先順位のつけ方……………	ラリー・コール……………	19
「いと高き者の子ら」……………	ジョン・A・トベトネス……………	22
強風に払い清められた……………	スーザン・チエコ・エライアソン……………	24
祝福による祝福……………	リベッカ・デノス・マン……………	27
芽吹く種——宣教師訓練センター……………	メルビン・J・レビット……………	28
名も知らない人……………	ジェニー・ウルジー・バズガード……………	34
私の兄弟がそこに住んでいます……………	リー・マホニー……………	36
隣の席……………	ジーン・R・クック……………	39
メリサのパプテスマ……………	ヘレン・E・ケイザー……………	42
カインとアベル(「聖典からの物語」より)……………		48
ハローウィーンのジャコランタン……………		52
ローカルページ……………		54

表紙写真：スイス山岳風景 (ウィリアム・フロイド・ホールドマン撮影)

1984年10月号 聖徒の道 第28巻第10号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

東京都港区南麻布5-10-30

電話 03-440-2351

印刷所 株式会社 明文社

定 価 年間予約／海外予約2,200円(送料共)

半年予約1,100円(送料共)

1部180円, 大会号350円

International Magazine PBMA0507JA Printed in Tokyo, Japan.

©1984 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 渋谷ブックセンター 振替口座番号/東京0-41512)にてご送金いただければ、直接郵送致します。注:お届け先の変更がありましたら、早急に渋谷ブックセンターにご連絡下さい。●「聖徒の道」のご注文・お支払いなどの連絡先……〒150 東京都渋谷区桜丘町28-8/末日聖徒イエス・キリスト教会 資料管理部渋谷ブックセンター/☎03-464-1617(代)

霊的真理を 身に受け、 実行する



第一副管長

マリオン・G・ロムニー

私は、主がニコデモと話されたことを読み、深く考えるたびに心を動かされ、そこから教訓を得てきました。ユダヤ教のサンビドリンの一員であった学識あるニコデモは、主が何者なのかまた人々に何を伝えようとしておられるのかをもっと詳しく知るためにイエスの所へやって来たのです。

ニコデモが「夜イエスのもとにきて言った、『先生、わたしたちはあなたが神からこられた教師であることを知っています。神がご一緒でないなら、あなたがなさっておられるようなしるしは、だれにもできはしません。』」（ヨハネ3：2）

真理を求めようとするニコデモは、主に尋ね、主ご自身から答えを得ようとしていました。しかし、ニコデモがそこでわかったこ

とは、神の御子は卓越した教師であるということだけでした。ニコデモ自身の言葉にもあるように、彼は主の奇跡を実際に見聞きしたうえで、そう判断したのです。

ところがイエスは、ニコデモが求めている知識は奇跡や偉大な出来事を見聞きするだけで得られるものではないことを諭されました。そして、さらに一歩進んだ学びの過程を経なければそうした知識は得られないことを、ひとつの真理としてお教えになりました。すなわち感覚でとらえられる世界を超越した無限の實在の世界にもっと敏感でなければ、神の王国を見いだすことも、理解することも、そしてそこに入ることもできないことを、イエスははっきりと指摘されたのです。

「イエスは答えて言われた、『よくよくあ

なたに言うておく。だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない。』

(ヨハネ3:3)

ところが、ニコデモのような学識ある賢人にも、主の言われたこの言葉の意味がのみ込めませんでした。実際、ニコデモは戸惑い、このように尋ねています。「人は年をとってから生れることが、どうしてできますか。もう一度、母の胎にはいつて生れることができますでしょうか。」(ヨハネ3:4)

イエスはニコデモの悟りの眼を開かせようと、このように言われました。「肉から生れる者は肉であり、霊から生れる者は霊である。」(ヨハネ3:6)

しかし、まだ霊から生まれていなかったニコデモは、霊から来るものに対して認識を欠いていました。ニコデモには、イエスが知識の源はふたつあると言っておられるのがわからなかったのです。ふたつの異なった学習方法、すなわちこの肉体を通して学ぶ方法とみたまによって学ぶ方法があることをイエスは教えておられたのです。

この同じ問題についてコリント人に説明をしている使徒パウロは、主がニコデモに話されたあの同じ真理に焦点をしばっています。コリント人に対しパウロは次のように言っています。「わたしの言葉もわたしの宣教も、巧みな知恵の言葉によらないで、霊……の証明によったのである。

それは、あなたがたの信仰が人の知恵によらないで、神の力によるものとなるためであった。

しかし、聖書に書いてあるとおり、『目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を

愛する者たちのために備えられた。』(すなわちみたまに関する事柄や永遠に関する真理、偉大な出来事やしるしの意味、究極的な真理などは、研究や学習といった方法だけでは得られないということ)

そして、それを神は、御霊によってわたしたちに啓示して下さったのである。御霊はすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである。

生れながらの人は、神の御霊の賜物を受けられない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない。」(Iコリント2:4-5, 9-10, 14)

このニコデモとの話の中で、主は知識の靈的な源についてさらに次のように説いておられます。「あなたがたは新しく生れなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うには及ばない。

風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生れる者もみな、それと同じである。」(ヨハネ3:7-8)

この聖句を深く考えてみると、主はここで、聖霊の賜を通して得られる知識(この場合は主が言われているように新しく生まれるということ)は、目には見えないが吹く風のように確かなものであるということ断言されていたと思います。新たに生まれていない人々には理解しにくいかもしれませんが、みたまから来ることを学ぶプロセスは現実のものとして存在するのです。

末日において、主は予言者ジョセフ・スミスを通して、再びこの基本的な真理を語つ

聖霊の賜を通して得られる
知識は、目には見えないが
吹く風のように確かなもの
である。



ておられます。啓示によってジョセフ・スミスに与えられたカートランド神殿の献堂の祈りの中で、予言者は次のように祈って

います。「聖なる父よ、この宮居の中に於て礼拝するすべての人に……智恵ある言を教え、また父の言いたまいし如く、正に研究

と信仰とによりて学問を求むることを誠に許したまえ……。」

予言者は何のためにそう願ったのでしょうか。こうあります。「彼ら父の中にありて成長し、聖霊の完全なる恩恵と能力とを受け、父の律法に従いて組織を立て、あらゆる必要なものを得るために備えをな」(教義と聖約 109:14-15) すためでした。

この祈りから、主は聖きみたまに導かれてはじめて完璧な学習ができると考えておられることがわかります。別の折に、主はこのようにも言われました。「もしわたしの言葉のうちにとどまっておるなら、あなたがたは……真理を知るであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう。」(ヨハネ 8:31-32)

私たちを罪や悪、誤った概念、誤解、無益な習慣や行為から解放してくれる真理は、聖きみたまを通してのみ手にすることができるのです。

世の歴史を見ても、今日ほどこの世の知識が遠方まで広く行きわたっている時代はありません。にもかかわらず、私たちの周囲には、まだ主の教えておられる真理やそこからもたらされる自由を味わっていない人々が大量にいます。というより、そうした人々は真理や本当の自由というものは手の届かないものと思っているのかもしれませんが。

私たちがそうした真理や平安、幸福、安心感を、また真理を通して信仰ある正しい人々にもたらされる自由を得るために、普通の学習方法では得られない所にある知識の源を引き出してくること、これこそが御父の救いの計画の核心と言えるのではない

でしょうか。

この確かな知識を得るには、しばしば祈り、熱心に聖典を学び、日々の生活で正しい愛ある行ないをしながら、真心から正直に神の真理を得たいと願うことが必要です。しかし主は、そうした条件をすべての人が満たせるわけではないことをよくご存じです。主は私たちに次のようなことを思い起こさせてくださっています。「その光は暗黒に輝くに暗黒はこれを覚らざりき。」(教義と聖約 88:49)

しかし、末日の聖徒である私たちが主や主の予言者が示してくださった方法に従えば、必ずや今住むこの偉大な末日の神権時代に関する知識を得、末日に予言されている大いなる前ぶれとなる出来事や艱難を知ることができるでしょう。

世の初めから、聖霊の賜と力によって神の真理が人々に明らかにされてきました。この真理は父祖アダムに、そしてあらゆる神権時代を通じて予言者たちに伝えられてきました。その予言者たちは、真理を生活の中に取り入れようとする人々のためにそれらを教え、書き記してきたのです。

永遠の真理というこの無尽蔵の源から、神の性質や神と私たちとの関係についての真の知識がもたらされてきました。永遠の真理なくしては、だれも人生の目的や人生の大いなる出来事を理解することはできません。

私たちは末日聖徒として、子供である私たちに對する神の深い愛を知っています。神は私たちに、日常生活の中で霊的なものに敏感になる方法を学び、それを応用するよう望んでおられます。そうすることによ

裸であったときに着せ、病気のときに見舞い、獄にいたときに尋ねてくれたからである。



り、だれにでも用意されている無尽蔵の知識と導きの源に近づけるようにするためです。

私たちにどうしてもそのような靈感に満ちた知識が必要なのです。日々生活していくときに、神を求め、み教えを実行していくときに、そして結婚相手を見つげるときにそれらが必要です。また親としての責任を果たすときに、周囲の人々が福音の真理を知り、みずから神を見いだせるよう助けを与えるときに、聖典を理解しようとするときに、そして今日の予言者の勧告に従おうとするときにも必要です。さらに、今生きている最後の神権時代の重要な時期について考えるときに、そして終わりまで忠実に耐え忍ぼうとするときにそうした知識が必要です。このようなたくさんの方の事柄で、

そう、生活のあらゆる面に私たちは確かな源から来る導きと知識が必要なのです。

私たちがより一層神に近づき、み教えを生活に取り入れることによって祝福を味わうには、神が私たちの知識を日常生活の中で奉仕という形で実践するよう望んでおられることを常に心に留めておかなければなりません。私たちは次のことを思い起こすべきです。

「人の子が栄光の中にすべての御使たちを従えて来るとき、彼はその栄光の座につくであろう。

そして、すべての国民をその前に集めて、羊飼が羊とやぎとを分けるように、彼らをより分け、

羊を右に、やぎを左におくであろう。

そのとき、王は右にいる人々に言うであろう、『わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい。

あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせ、かわいていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、

裸であったときに着せ、病気のときに見舞い、獄にいたときに尋ねてくれたからである。』

そのとき、正しい者たちは答えて言うであろう、『主よ、いつ、わたしたちは、あなたが空腹であるのを見て食物をめぐみ、かわいているのを見て飲ませましたか。

いつあなたが旅人であるのを見て宿を貸し、裸なのを見て着せましたか。

また、いつあなたが病気をし、獄にいたのを見て、あなたの所に参りましたか。』

すると、王は答えて言うであろう、『あな

たがたによく言うておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。』

それから、左にいる人々にも言うであろう、『のろわれた者どもよ、わたしを離れて、悪魔とその使^{つかい}たちとのために用意されている永遠の火にはいつてしまえ。

あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせず、かわいていたときに飲ませず、旅人であったときに宿を貸さず、裸であったときに着せず、また病気のときや、獄にいたときに、わたしを尋ねてくれなかったからである。』

そのとき、彼らもまた答えて言うであろう、『主よ、いつ、あなたが空腹であり、かわいておられ、旅人であり、裸であり、病気があり、獄におられたのを見て、わたしたちはお世話をしませんでしたか。』

そのとき、彼は答えて言うであろう、『あなたがたによく言うておく。これらの最も小さい者のひとりにしなかったのは、すなわち、わたしにしなかったのである。』

そして彼らは永遠の刑罰を受け、正しい者は永遠の生命に入るであろう。(マタイ 25 : 31-46)

私たちは聖きみたまから真理と知識を得るようすべきです。なぜなら、そうして得た真理こそが本質的に私たちの生活のあらゆる面に影響を与えてくれるものだからです。そして、そのうえで私たちに与えられているチャレンジは、日常生活で出会うすべての人々、私たちとかかわりのある人人のために、自分の知識や生活を役立て、慈愛に満ちた態度を示すことなのです。

ホームティーチャーへの提案

強調点：ホームティーチングのとき、以下の点を強調するとよいでしょう。

1. 知識の源はふたつある。ふたつの異なった学習方法、すなわちこの肉体を通して学ぶ方法とみたまの声によって学ぶ方法がある。
2. みたまから来ることを学ぶプロセスは、現実に存在する。しかし、そうしたみたまの働きを理解するには新たに生まれなければならない。
3. 私たちを罪や悪、誤った概念、誤解、無益な習慣や行為から解放してくれる真理は、聖きみたまを通してのみ手にすることができる。
4. 日々生活していくときに、また神を求め、み教えを実行していくときに、さらには周囲の人々が福音の真理を知るよう助けを与えるときに、私たちに必要なのは霊感に満ちた知識が必要である。

話し合いを進めるために

1. 聖きみたまの導きによって生活していくことの必要性について、自分が感じていることを話す。家族にも感じていることを話してもらおう。
2. このメッセージの中に、家庭で読んだり、話し合ったりするのによい聖句や言葉はないだろうか。
3. 話し合いをより充実したものとするために、訪問する前に家長と話し合っておくことよい。永遠の真理と聖霊を伴侶とすることの必要性に関して、定員会指導者や監督から家長にあてられたメッセージはないだろうか。

仲むつまじく あるために

◎ チャート・マデスター

以前私は、物の見方や態度が非常に非難めいていて、奥さんや子供たちによく軽蔑的な汚ない言葉を投げつけていたある男性と話したことがあります。彼のそういう人をとがめるような態度を反省させ改めさせようと、私は彼と奥さんに何度か会って話をしました。ところが彼の方はそんな私に腹を立て、悪口をあげると、私の事務所を飛び出していったのです。その後、奥さんは別居を申し出、彼の方は結局両親と同居することになりました。私はこの夫婦とはもう二度と会うことがないだろうと思っていました。

ところがそれから2カ月ほどたって、彼から電話がかかってきたのです。驚いたのは言うまでもありません。少し話を聞いてほしいというのでした。前の失礼な態度をわびたあと、彼は何があったかを話してくれました。彼は両親と同居したことで、自分自身をよりはっきり知ることができたと言うのです。両親がいつもお互いをけなし

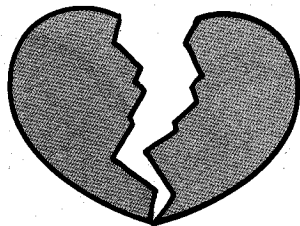
合ったりとがめたり、ののしり合ったりしているのを見て、自分も彼らと同じようなことをしていることに気づいたというのでした。両親のそうした態度にいや気がさし、彼はやがて夜家に帰るのがおっくうになってきたのです。

そして特に、会社の同僚などの人をとがめる態度を非常に気にするようになってきました。同僚たちがうわさ話や不平、お互いのけなし合いに無駄に時間を費やしているように思えてならなかったのです。

家族と離れてから彼の心は次第になごみ始め、今まで家族に対してとってきた態度を反省するようになりました。そして、妻や子供たちに暴力をふるい、汚ない言葉を投げつけていたときのことが頭をかすめ、家族に償いをしなければと思うようになったのです。彼の胸の中は、申し訳なささと反省の気持ちで一杯になっていました。

私に助けを求めにやって来た彼がすでに改心していることは、はっきりわかりまし

へりくだりたる心と
悔いる精神とを持つたときに、
性質が変えられ
心が清められるというのが
主の約束です。



た。彼ははじめて、自分がどんなにひどいことをしてきたかを自分自身で認めていたのです。もちろん、それは今までもわかっていたことですが、彼は自分を欺いて、自分が不幸なのは妻や子供や環境のせいであると信じ込んでいたのです。そして周囲の人々が自分をもっとよく理解し愛を示してくれさえすれば、そうした問題に悩まされることはなかったと思っていたのです。彼は不幸や自己憐憫れんひんといったくもの巣にはまり込み、自分自身がその巣をはった張本人であることを忘れてしていました。

しかし今、彼には本当の自分の姿が見え始めました。その結果彼は、へりくだりたる心と悔いる精神とを持つ非常に謙遜な人となりました。進歩するにはみずから変わり、主の助けを求めなければならないことがわかったのです。彼にはこの問題が精神的なもので、しかも自分がその発端となっていることがわかりました。またその問題に対処していく鍵が自分にあることもわかっていました。

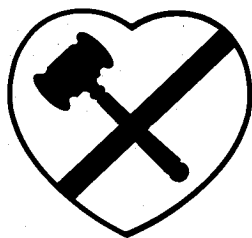
彼はもういつでも変えられる状態になりました。心の中のみたまの働きに従うにつれ、彼の心は和らいでいきました。そして私からのたびたびの忠告や人々からの励ましも必要とせず、彼は積極的にそして永久的に変ったのです。今まで私が相談を受けてきた人々の中で、この人の改心ほど劇的なものはありません。主が聖典や予言者を通

して教えてくださったことを私にはっきり認識させてくれた彼に、私はいつまでも感謝し続けるでしょう。主は、平和な仲むつまじい関係を維持していく鍵は、福音の基本原則の応用にあることを教えてくださったのです。しかし、多くの人々はそのことをよく理解していないようです。言い換えれば、ふたりの関係が平和な仲むつまじいものになるには、まず自分自身の心が穏やかで平安でなければなりません。そのような平安は、みたまの細い静かな声の導くままに善を行なったときに得られるのです。

以上のことは、形は違うかもしれませんが、会員に忠告を与える際にどの監督も話していることです。しかし、どうしても態度を変える技術の方にばかり目が行って、無視されてしまうことが多いようです。一般には、目標設定や行動目的の設定、行動変換の技術を取り入れ、積極的になることによって自分を変えることができると言われていています。自己改善の方法はほかにもいろいろあげられています。これらの方法を使えばある程度までは望ましい変化が得られるかもしれませんが、それはこの世だけの不完全なものにすぎません。人間が自分でできるのはそれが精一杯なのです。

主は、福音の原則を通して、神によってのみ私たちの性質が大きく変わることを聖典の中で明らかにしておられます。(ヒラマン3：35参照) 私たちがへりくだりたる心

ふたりの仲が
うまくいかなくなると、
相手の人には不利な
自分のためだけの正義が
行なわれることを望むのです。



と悔いる精神とを持ったときに、性質が変えられ心が清められるというのが主の約束です。そのとき私たちは「悪を行う性質をなくして常に善を行う」（モーサヤ5：2）ようになるのです。そうした良い状態からはおのずと調和のとれた関係が生まれてきます。なぜなら、そのような状態では、「互いに傷つけ合う心がな」（モーサヤ4：13）いからです。

ではへりくだりたる心と悔いる精神を持つとはどういうことでしょうか。このへりくだりたる心というのは、何の罰も受ける必要のない清い神聖な御方イエス・キリストが、私たちが苦しまないよう、私たちのあらゆる罪に対する罰をその身に引き受けてくださったことを、神聖な深い悲しみの気持ちで認めるときに心に宿るものです。私たち一人一人のために苦しまれたキリストの苦しみの大きさを真心から知ることは、私たちにとり胸の痛む謙遜な経験と言えます。そして当然ながら、それは私たちの心を変えるきっかけともなり、私たちはその主の愛に報いようとするのです。さらにへりくだりたる心というのは、自分自身の罪とその罪が自分の中に、また人々の中にもたらした苦しみを心から悲しむことをも意味しています。

悔いる精神とは、罪を深く反省する気持ちのことです。人間として墮落した状態にあることを認めたあとで（モーサヤ4：5

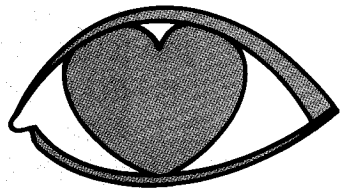
参照）、私たちは悔い改めながら主を求め、新たな心とキリストの贖いの血による^{ゆる}赦しと慈悲を願うのです。

私たちがキリストを信じ、頼るなら、主は私たちが変われるように必ず助けを与えてくださるはずです。真心から誠実に悔い改めるときに、私たちは自分の欠点だけに目を向け、他人のことよりも自分がどう変わらなければならぬかを認めるようになるのです。そして助けを願いながらキリストの赦しと慈悲を願い求めるときに、キリストのみたまは私たちの心を変え、キリストのような生活を送るために必要なその場に即した導きを与えてくれます。このようにして、神のみたまは私たちを墮落したごう慢な状態から、キリストのような正しい生活ができる状態へと変えてくれるのです。

幸福を見つけるのに、福音の原則などに頼らないでもっとうまい魔法のような方法があったらどんなに楽かも知れません。しかしそのような方法はないのです。悩みごとの相談を受ける聖職者や専門のカウンセラーが決まって目にするのは、自分たちの好ましくない態度を改めないままで平和な仲むつまじい関係を望んでいる人々です。彼らは神のみたまという清められた力よりもこの世的なもので平安や義の心を得たいと望んでいるのです。

救い主はまさしく真理を述べておられたと思います。「わたしは平安をあなたがたに

みたまを受け、
現実に目を向けるなら、
人間はだれでも皆
長所と短所の両方を
持ち合わせていることがわかります。



残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。」(ヨハネ14：27)

「正義」よりも「慈悲」を

ふたりの仲がうまくいかなくなると、お互いに相手が悪いとする責め合いになります。お互いに相手が変わるべきだと主張するのは。つまり正義が行なわれることを望むわけですが、その正義も普通は相手の人には不利な自分のためだけの正義が行なわれることを望むのです。このような「正義」は復讐ふくしゅう以外の何ものでもありません。

「復讐」することにやっきになると、相手を責め、非難し、ついには怒らせてしまうことになります。そして今度は怒った相手が悪いと責めるのです。このような、自己を正当化する方法で相手を見るのをやめてこそ、私たちの中に永続性のある確実な変化が期待できるのです。すなわち、相手に変わることを期待するのをやめ、自分自身に正直になり、自分自身の態度に責任を持ってこそはじめて改心することができるというわけです。自分の欠点に対して素直になると、私たちは相手の人をもっと愛を持って見るができるようになります。

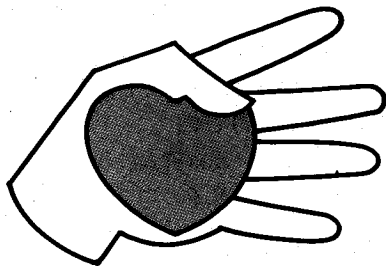
私はある女性に、夫を非難するだけでなく、もっと誠実に愛情を持って夫を見るよう勧め、彼女がそうできるよう助けを与えたことがあります。私はまず彼女の夫に対

する私なりの意見を述べ、彼が今置かれている状況を話すことから始めることを提案しました。そしてその話を途中から彼女に引きついでもらうことにし、彼女の意見を言ってもらうことにしたのです。まず私は彼の問題や弱点をいくつか述べ、それから彼の長所をあげました。そしてそこから彼女に続けてもらいました。彼女は夫が子供たちにどんなに良くしてくれているか、ワード部ではどんなによく働いてくれているか、そして、どんなに人々と仲よくうまくやってくれているかを話してくれました。と、突然彼女はショックを受けたような顔で私の方を見ました。「私が心に描いているのはどういう人かおわかりですか。私が結婚を決めたときの彼なんです。」私は彼女に、彼はそのときから少しも変わっていないこと、ただ彼女の方が夫の欠点にばかり目が行き、長所に目を向けなくなってしまっていることを指摘しました。

彼女は夫の方を見ました。そして顔を夫の肩にうずめると泣きじゃくりながら言いました。「ごめんなさい、あなた。今までずっとあんなふうに責めたり、冷たくして……許してもらえるかしら。」

彼女は自分を哀れと思い、夫の接し方が間違っていると思い込んで相談にやってきました。その彼女が、夫に対する自分の態度を深く反省しながら帰って行ったのです。事実を認めたことで彼女の心は和らぎ、真

主の慈悲を受けるたびに、
私たちがほかの人々に
慈悲を示すことが
どんなに必要なものであるかが
よりはっきりわかってきます。



心から変わりたいと思うようになったので
す。

相手のことより自分自身の態度や行動にもっと目を向けるようになると、お互いの関係が良い方向へ進んでいきます。私たちには相手の人へ変わるように強制したり、もっと立派な責任感ある人になるよう押しつけたりすることはできません。彼らには思い通りに行動する自由意志があるのです。そこで問題なのは、私たちが彼らにどう対処していったらよいかということです。まず私たちは思いやりを示しているでしょうか。人を許しているでしょうか。忍耐しているでしょうか。また彼らが責任感のある人であろうとなかろうと、心に向けているでしょうか。欠点の多い私たちが、とるべき行動を一貫してとる強さを身につけるには、熱心に神のみたまを求める以外にありません。人間の教義が強調して説いているのは自制ぐらいなもので、それはほんの一部分にしか役立ちません。みたまの賜こそ、真の強さの源と言えます。

この女性は夫に対して、自分が非難するばかりで許すということをしなかったことを認めました。そのことで夫は、自分の弱点に対してもっと正直になろうという気持ちになったのです。口論をしてどちらか引き下がらなければ、そこにはいきづまりが生じるだけです。そうしたいきづまりを解消する唯一の方法は、どちらか一方が（な

るべく両方が望ましいのですが）問題になっていることの中で自分に関係ある点に責任をとることによって、また事態を改善するために自分が変われる方法を提案するなどして、今までとは違った行動を起こすことです。相手側がそのような行動に出てくるのを待っていたり、相手をとがめて変わらせようとするのは、争いを長引かせるだけです。

いわゆる「正義」（人々は「復讐」という意味に解釈しているようですが）の律法に従う人々は、相手方に多くを要求することになります。そして相手が自分の期待に^{こた}えないと腹を立て、罰を与えて自分に従わせようとするのです。私たちは自分の罪や欠点を認識していないと、どうしても人を責めたり独善的な態度をとったりしがちです。

しかし十分謙遜になり、自分自身の弱点を認め、日々主に心向け赦しと導きを願うなら、私たちは主のみたまを受けることができます。そしてそこには調和のとれた仲むつまじい関係が生まれてきます。主の慈悲を受けるたびにそれが私たちにどんなに必要なものかがよりはっきりわかってきます。そして今度は、私たちがほかの人々に慈悲を示し、主が私たちにしてくださったように人々を許し、愛を注がなければと思うようになるのです。だからといってお互いに正直な気持ちで意見を戦わせること

をしないというわけではありません。問題を正直に、率直に、そしてとがめることなく解決していくのです。

ある冬のこと、私は隣人のうさぎの世話を引き受けていた息子のロブから、慈悲を与え、受けることについて大切な教訓を得ました。ある晩、彼はうさぎの飲み水を入れておくびんを空にするのを忘れてしまったのです。翌朝、そのびんの水はすっかり凍っていました。自分の失敗に気づいた彼は私を少しも哀れむことをせず、忘れたことに対していら立ちをおぼえました。そして、彼のせいで朝の準備が遅れてしまったことを責めました。

ところが会社に着いてから、そのことがとても気に入り出したのです。私はすぐに、ロブの失敗は自分もよくやるような人間としての小さなミスにほかならないことを認め、自分の欠点を考えてみれば、彼の過ちに腹を立てるのは正しくないことに気づいたのです。はっきりしているのは、ロブは大体において何でもきちんとやる誠実な少年であるということです。

私は自分の間違った態度を反省し、学校で彼に会ってあやまりました。彼はすべてのことを同情的にとらえてくれていました。私が間違っていたにもかかわらず、彼は私の立場に立って考え、少しも腹を立てなかったのです。

この経験を通して、私は非常に謙遜になることができました。最初から私が正しい心を持っていたら、ロブのちょっとした失敗などにいら立つようなこともなかったでしょう。またもしロブに思いやりの気持ちがなかったら、彼は私の態度をあてつけと思ひ込み、それによって彼の自尊心が傷つき、私たちの関係もまずいものになってい

たでしょう。私はあやまったことで（それは悔い改めの一部ですが）、心が安らぐのを感じました。それはちょうどベンジャミン王の民が自分たちの悪事を認め、主に赦しを願ったときに得られたものと同じ気持ちでした。（モーサヤ4：3参照）

思いやりを持って相手を見る

夫婦が、「復讐心」やとがめの気持ちではなく、慈悲深い思いやりの気持ちでお互いを見れるように、私は彼らに次のような方法を取り入れるように勧めています。この方法は、彼らに心がまえというものがいかに人とのかかわり方を決める大切なものかを理解させてくれます。私の知っている大勢の監督たちも相談を受けたときにこの方法を取り入れ、その効果を認めています。

まずふたりに目を閉じてもらいます。それから気が散らないように私の方も目を閉じ、次のように言うのです。

「相手のことで悩んでいることがあれば全部思い浮かべてみてください。相手のことで気に入らないこと、腹が立つような癖や性質、とがめ方やけなし方などなんでも結構です。1分間考えてみてください。

（間-1分）

では、今頭の中に浮かんだものをすべて消し去ってください。焼いても埋めてもあるいはごみ箱に捨ててもいいのです。とにかく永久にそうした思いが残らないよう消し去ってください。

次に、相手が今生活の中で直面している試しやチャレンジ、困難を考えてみてください。どんな問題に取り組んでいるのか、またそうした問題に直面するということはその人にとってどんなものなのか、30秒ほど考えてみてください。（間-30秒）

では次に、あなたの伴侶の良い特質や性質、つまりあなたやほかの人々が感心しているもの、恋愛中にあなたの心を打ったものについて考えてみてください。(間-30秒)

次に、この何年間かで楽しかったときのことを考えてみてください。愛や親密感を感じたときのこと、一緒に笑ったり、お互いに助け合ったりしたときのこと、子供の誕生など大きな出来事を経験したときのことを思い出してみてください。(間-30秒)

では目を開けてください。今心の中にある伴侶に対する気持ちはどんな気持ちですか。]

この対象が夫や妻であろうと子供たちであろうと、この方法にまじめに取り組んだ夫婦は、例外なくこの段階で今までにない思いやりや理解、心の温かさや許しの気持ち、親切心、愛情などを感じるはずです。実に多くの人々が今までの自分の思いやりのなさを嘆いてきました。彼らは、人を正直に思いやりの目で見ると、恨みやとがめの気持ちで見ているときは違って見えてくることに気づくのです。そして相手に仕返すことばかりに時間をかけ、いかに建設的な思いやりの光の中でお互いを見ようとしていないかがわかってくるのです。

私はかつて、非常に感動的な経験をしました。それは、ある夫婦にこの方法を試したときのことですが、質問が終わったあとで夫が妻の方を見てこう言ったのです。「君が今までほくに示してくれた愛に、ほくや子供たちのために払ってくれた犠牲に、そしてあんなにわがままだったほくを許してくれたことに一体どうやって感謝したらいいんだろう。」

みたまを豊かに受け、正直にそして正し

く現実にも目を向けるなら、人間はだれでも皆長所と短所の両方を持ち合わせていることがわかります。私たちは自分自身に欠点がありながら、人の欠点に腹を立ててよいわけがありません。このことに気がつくと、へりくだりたる心と悔いる精神が宿り、私たちは人々に思いやりを持って接することができるようになるのです。

モルモン経には、この世的で利己的な心から善の心へ変わった人々の例が数多く出ています。そのような変化はどれも信仰を持ち真心から悔い改めた人々が神の賜として授かったもので、自分の力で生み出してきたものではありません。

「しかし謙遜な人たちはたびたび断食して祈り、ますますへりくだっていいよ固くキリストを信仰したから、喜びと慰めとその心に満ち、その胸は清く神聖になった。このようなきよめはこれらの人がその心を全く神に従わせたからできたのである。」(ヒラマン3:35)

私たちが、キリストへの信仰と悔い改めを通して自分自身の行ないを変えることができます。神のみたまの聖めの力は、私たちが「主キリストの身代りの贖罪に由って聖徒」(モーサヤ3:19)となれるよう、私たちの性質や個性をも変えてくれます。さらにすばらしいのは、神のみたまを豊かに受けると、そのみたまの結ぶ実である愛や喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制を味わうことができることです。(ガラテヤ5:22-23参照)

このように私たち自身の心が変わると、対人関係も改善されていくのです。

*C・リチャード・チデスター：結婚(家族)カウンセラー。8児の父親、教会教育部地域部長補佐

「肉と高き者の子ら」

1962年、スイスのジュネーブで伝道中のことです。ある晩、私は同僚と共にひとりの男性にレッスンをしていました。神は骨肉の体を持っておられ、私たちは神に似せて創造されたことなど、レッスンは神の性質にしばって行なわれていました。求道者の彼は、そのような考えに引かれたらしく、すぐにその教えを受け入れました。そして彼がその教義と教義の持つ深い意味に思いをはせるたびに私たちはレッスンを何度か中断しなければなりません。

私たちは伝道中、このようなことを幾度となく経験してきました。もちろん伝道後もそうです。事実、これは大勢の宣教師たちが体験していることです。ほとんどのクリスチャンやユダヤ教の人々は、神は感情も姿形もなく、宇宙を満たしているが宇宙に属さない霊のお方であると信じています。このような考えが公に受け入れられているにもかかわらず、宣教師たちが彼らに神会についてのレッスンをすると、神に関する末日聖徒の教えを即座に受け入れてくれることがよくあります。宣教師たちはそうした応答にかえって戸惑ってしまうのです。また彼らが神に関する自分たちの教会の教えにまったく無知で、議論の余地さえない場合もあります。神に対する彼らの考

え方は、基本的な論理に聖書からの知識が併^あって生まれてきたものでしょう。

しかし、この論理は時として人にとてつもない考え方をさせてしまいます。骨肉の体を持ちたもう神の話をする、それが神聖な力を持たない神に簡単に発展してしまうのです。数年前、神はほかの惑星から来た「宇宙人」にすぎず、その宇宙船や装置が初期のイスラエル人や人々を驚かしたのだという考えが生まれ、人々の考えが随分飛躍したことがありました。しかしこの考えでいくと、私たちには創造主もなく、神聖な計画も墮落もない、そしてもちろん贖いもないということになるのです。

私たちは、聖書と一致した回復された福音から、私たちを愛し、私たちにご自身のようになることを望んでおられる天父の真の性質を教わることができることに感謝しなければなりません。

数年前、総大会を終えてソルトレーク・シティのテンプルスクウェアをあとにしようとしていたときのことで、私は反モルモンのパンフレットを配っているある小さなグループに出くわしました。そのグループのリーダーは、自分を「モルモン教徒に教えを説く宣教師」と思っているようでした。私は彼がなぜそのようなことに時

間を費やしているのか知りたいと思いました。またそのパンフレットも私の興味をそそるものでした。というのも、そこに書かれていることから、その人は末日聖徒が本心に信じていることを何ひとつわかっていないことがはっきりしていたからです。

私と少し話をしたあとで、彼はポケットから質問のリストを取り出しました。彼は教会員たちに、たびたびそうした質問を投げかけていたのです。「神は人間ですか。」彼は確信ありげに尋ねました。

「いいえ。」私は答えました。「神は人間ではありません。聖書にはっきり出ています。」(民数23:19; サムエル上15:29参照)「そう思っているのはあなただけじゃないんですか。あなたの教会は神を人間であると教えている。」彼はそう言いました。

「いいえ、違います。」私は言いました。「では、私たちの教会が教えていることを聖書の中から読ませてください。」そう言って私は詩篇82篇6節を引用しました。「あなたがたは神だ、あなたがたは皆いと高き者の子だ。」

「神は人間ではありません。人間が神なのです。少なくとも神になることができるのです。このことはイエスも、詩篇のその箇所を引用してヨハネ伝10章の中でユダヤ人たちに話しておられます。」(ヨハネ10:

相手にとっては失敗に終わったこのコンタクトのあとで、その人はすぐ私の前を去り、別の人にパンフレットを配りに行きました。車の所まで歩いて行きながら、私はなんと多くのキリスト教の教会で、神の性質が曲解されていることかと思いました。ジョセフ・スミスは、神には体があるだけでなく「永遠に燃える火の中に住みたもう」ことを教えています。(「予言者ジョセフ・スミスの教え」p.361)(こうした考えは、多くの古代の資料からも明らかです)しかし多くのというより大多数の教会は、体を持っているのは「悪魔」であって(絵にはよく、つものやしっぽ、割れたひずめを持つ者として描かれている)、その悪魔は永遠に燃える火の中に住むと教えています。サタンは、多くのキリスト教の教えが、神と自分の立場をとり違えて人々の目に訴えていることに、ひとりほくそ笑んでいるに違いない、私は何度そう思ったか知りません。実際は、悪魔こそ霊なのです。

回復された福音の教えを真実の神に感謝したいと思います。

*ジョン・A・トベトネスは、博士号取得を目指す一方、ソルトレーク・シティのブリガム・ヤング大学センターで夜間クラスを教えている。またユタ州のカーズワード部で日曜学校教師をしている。

私たちは、回復された福音から天父の真の性格を教わる
ことのできることに感謝しなければなりません。

強風に 払い清められた

スーザン・チエコ・エライアソン

夢があまりにも真に迫っていたので、目が覚めました。私は寝ている同僚を起こさないように気をつけながら布団から出ると、夜明け前の暗がりの中を、手探りで日記帳を捜しました。ぼやけてあいまいな印象になってしまう前に、その夢を書きとめたかったのです。

「あなたは強風に払い清められた。」夢の中の人は私の顔をじっとのぞき見てそう言いました。そしてにっこりほほえみ、私が身を震わせて立っていたプラットフォームから去って行きました。あの人はだれでしょう。私が立っていたのはどこで、そしてなぜ？あの言葉の意味は何でしょう。短い詩に似たあの言葉は、焼き印のように私の心に刻まれました。

私の日本での伝道はもうすぐ終わろうとしていました。数日中に東京南伝道部を離れることになって、任期を終える宣教師の大半がそうであるように、私も過去1年半の自分の働きを批評家の目で見つめ直していました。立派な宣教師になれるように、自分にできることはすべて行なっただろうか。まあ、かなりは。そう、努力しました。

不完全な自分だけれど、本当に一生懸命働きました。でも、最後の1、2カ月は特につらい時期でした。すごい暑さで、同僚がウイルスに感染して具合を悪くしました。私も気落ちしていたので、伝道中に自分が成長できた良い点を思い起こして、自分の働きをもっと積極的に評価しなければいけないと感じました。

たとえば、厳寒の2月に行なった街頭伝道によって、今ほやほやの静岡ワード部ヤング・アダルト代表がバプテスマを受けましたし、伝道部長の「全力投球」計画に従ったおかげで、ほかにも霊的に優れた未来の教会員に出会い、彼らを教える機会に恵まれました。様々な違った個性の人たちと仲良くやっていくことを学んだことから、私の忍耐力と愛は大きくなりました。真理に飢え乾いている人たちに頻繁に証を述べたことで、天父に近くなりました。バプテスマがない時期を経験して、天父に頼る心が育ちました。本当に、私は自分を含めて人の生活を良い方に変える仕事に携わっていたのです。

あの言葉がまた耳に響いてきました。「強風に払い清められた。」確かにみたまが何か大切なことを私に伝えてくださったのだと思いました。

私はその夢に励まされ、元気はつつつとして残る伝道の日々を過ごしました。なじんだ景色が、音が、香りが、記憶のページにしっかり根を張りました。のりでくるんだおにぎりはこれまでになくおいしく、満員の電車に乗るのはとても楽しく、もちろんのこと日本人の友達的笑顔や握手は一層温かでした。

ところが悲しいことに、富士山の姿は数週間前に見たきり、夏の霞がかかっ



神の最もすばらしい被造物のひとつ、
私に「立派に戦いぬく」ための霊感を
与えてくれたその山を、ひとり立ち止
まって見つめていました。

まっで見えないのです。伝道の半分をこの山から数マイルという土地で送り、富士山的美しさや力強さにすっかり魅せられた私は、富士山をたたえてこんな詩を作っていました。

気高き峰

太古の峰

連山にひとり気高くそびえたつ

明けの帝王

宵の守り手

それは象徴 空にも届く

わたしの可能性

私は、富士山から靈感を受けて自分の伝道期間の大半を過ごせたことに感謝し、もう一度見られないからといってくよくよしている時間はないと心に決めました。

天父は、信仰の祈りと新たな私の努力に報いてくださいました。福音の祝福に感動した新教会員が友人を私たちに紹介してください、その喜びがどうしたら得られるかを学ばれることになったのです。また、何カ月か前に紹介のレッスンだけを受けていた人から電話があり、残りのレッスンを受けたいということでした。中華料理店の経営者は、英語を話す外人向けの宣伝ポスター作成に手伝いを求めて来られて、途中からジョセフ・スミスのお話に熱心に耳を傾けてくださいました。伝道の最後の週には、6人の方がバプテスマを受けました。スーツケースに荷物を詰めていると、以前のうっ屈した気持ちやつらさが消えていて、心の奥底からの平安と満足が感じられるのがわかりました。

朝の出発は、かばんとさよならのあいさつが残っているだけです。いつもの通り麦

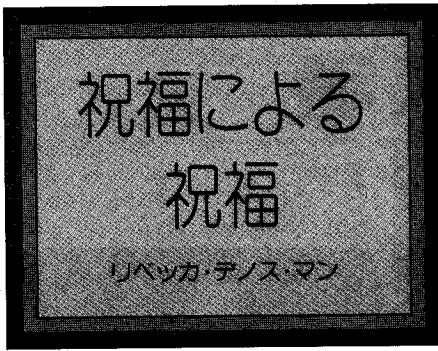
みかん（全麦のシリアルと温州みかん）の朝食をあわただしく済ませて、駅まで送ってくれるはずのバンに乗りとうとアパートから駆け出しました。ところがいざ外に出ると、私は家や愛する家族を恋しく思う自然な感情とはまったく違った、何か奇妙な爽快感を感じました。そよ風です。そうです、うだるような炎暑の中でしばらく忘れていたそよ風でした。5月以来、この土地を覆い続けていた濃い灰色のもやがなくなって、空が輝いています。強風にあおられ、大波が海岸に勢いよく打ち寄せて、新鮮な海からの霧がよどんだ空気を追い出したのです。

同僚と私は大喜びしました。そのとき、いつものように何気なく空を見あげると、そこには富士山が壮麗な姿を見せていました。くっきりとなだらかな線を描いて堂々と立っている富士山と私の間には、さえぎる雲ひとつありませんでした。自分のスーツケースがバンに積まれる間も、神の最も素晴らしい被造物のひとつ、私に「立派に戦いぬく」ための靈感を与えてくれたその山を、ひとり立ち止まって見つめていました。

と、思いにふける私の目を覚ますように、ひとりの若い姉妹が驚きと喜びに目を見開いて駆けて来ました。彼女は私の腕をつかみ、山を指さしながら、「姉妹、姉妹！」と叫びました。

「富士山よ！」彼女は息を切らせながらなおも言いました。「きょうはあんなによく富士山が見える。姉妹、空気が強風に払われてきれいになったからよ。」

*スーザン・チエコ・エライアソン：管理教育会社の地区マネージャー。テキサス州ヒューストンのワード部では初等協会教師とオルガニストの責任を持つ



この証は祖父のジェームズ・デノス(故人)の日記からの引用です。私も家族も、祖父の書き残したものからいつも力を得、励まされています。

カ リフォルニア州ロングビーチに(と書いていますが)住んでいたとき、リッチ兄弟から電話がかかった。「ジム、来て妻を祝福してくれないか。同僚を連れて」ということだった。

彼はメルケゼデク神権を受けてはいても、教会には活発でなく、知恵の言葉を守って



いなかったが、自分はひとりで行って彼を同僚にすればよいという強い気持ちがあった。家のベルを鳴らすと彼が出て来て、私の肩越しに後ろを見て「同僚はどこ」と聞いた。

私は彼を指さして「あなたが同僚だ」と言った。

「いやあ、だめだ、ジム。知ってるだろう。私はタバコを吸うし、たまにはビールも飲むよ。」

「うん、わかっている。」私は言った。「さっき電話をくれたとき、完全な人間に来て祝福をしてもらいたいって言っただろう。もしそうなら、私は帰るよ。完全ではないからね。」私はそう言って家に入り、姉妹の頭に油を注ぐのを彼に頼んだ。

「どうやるのか、わからないよ。」彼は言った。

「教えてあげるよ。」私は答えた。

そうして彼は頭に油を注ぎ、私が彼女を祝福した。彼女は翌日には快復した。

その後私はリッチ兄弟とじっくり話をし、兄弟はタバコと酒をやめると約束してくれた。2週間して電話が来た。「ジム、タバコはやめたよ。目下もうひとつの難問に取り組み中だ。」

もう2週間して、また彼から電話が来た。「問題はすっかり解決だ。」

それで私はリッチ兄弟を監督の所へ連れて行って、神殿推薦状をお願いした。監督は喜んで、神殿に入るにふさわしいと認めてくださった。リッチ兄弟姉妹はワード部で神殿奉仕の責任を受け、ふたりとも誠実に働いた。彼は1969年に亡くなった。

振り返ってよく考えるのだが、もしあのとき、リッチ兄弟に奥さんの祝福を手伝う資格がないと考えたとしたら、どうなっていたら。みたまのささやきに耳を傾け、指導者の指示に従うならば、私たちは約束された恵みを得るのだ。

種く吹芽

宣教師訓練センター

スリピン・ジョー・クリステン

宣 教師訓練センター（MTC）は成功物語そのものである。大勢の青年男女にとって、ここは有意義な経験の場となり、やって来る人のほとんどが知識においても人格においても予想以上の成長を遂げる。ここは頭と心に奇跡をもたらす場、長老や姉妹が自分の無限の可能性に初めて目を開かせられる場である。ここでは、所長以下全員が宣教師の成功を助ける仕事にまわっている。

「個々の宣教師の能力がどうであれ、来る人みんなを受け入れ、それぞれを宣教師にして送り出すのです。」ジョー・クリステン所長はインタビューに答えてこう語る。「私たちの目標は、間引くことではなく、全員が伝道に出て、しかも良い伝道ができるようにすることです。ここへ来る宣教師の99パーセント以上が伝道に出ています。出られない人の中には、健康上の問題のためにそのときはあきらめ、またもう一度出直す人がいます。それ以外は、思いとどまって伝道の召しを最後まで果たすように勧めでも、結局自分の選んで帰っていく人がほとんどです。しかしながら伝道に出る宣教師の割合は立派なものだと思います。

学力的に不適格だという理由で送り返す

ことはありませんし、言葉がなかなか覚えられないから行く先を変更するなどということもしていません。学ぶのが困難であっても、いろいろな方法があります。頭脳よりも霊性が、立派な宣教師になれるかどうかの肝心な点なのです。最優先していることは、みたまによって教えられる宣教師を送り出すということです。」

言語教育はMTCの主目的でないとはいえ、その成果には目をみはるものがある。世界のトップを行く言語訓練施設のひとつとして国際的に認められたMTCは、最新の訓練技術と卓越したカリキュラムを擁している。

教育のアプローチはひたすら積極的である。宣教師が会得に苦勞しているとみれば、弱点よりも長所をさぐるためにテストが行なわれる。MTCの調査から、最良の学習法は人に応じて様々であることがわかったからである。例に取ると、声に出さない方が暗唱しやすい人がいれば、出した方がよいという人もいる。本から視覚によってよく学ぶ人がいれば、レコードを使った聴覚による方がよい人もいる。細部から入って学ぶ人があれば、全体を概観する必要のある人もいる。MTCの職員は個々の宣教師

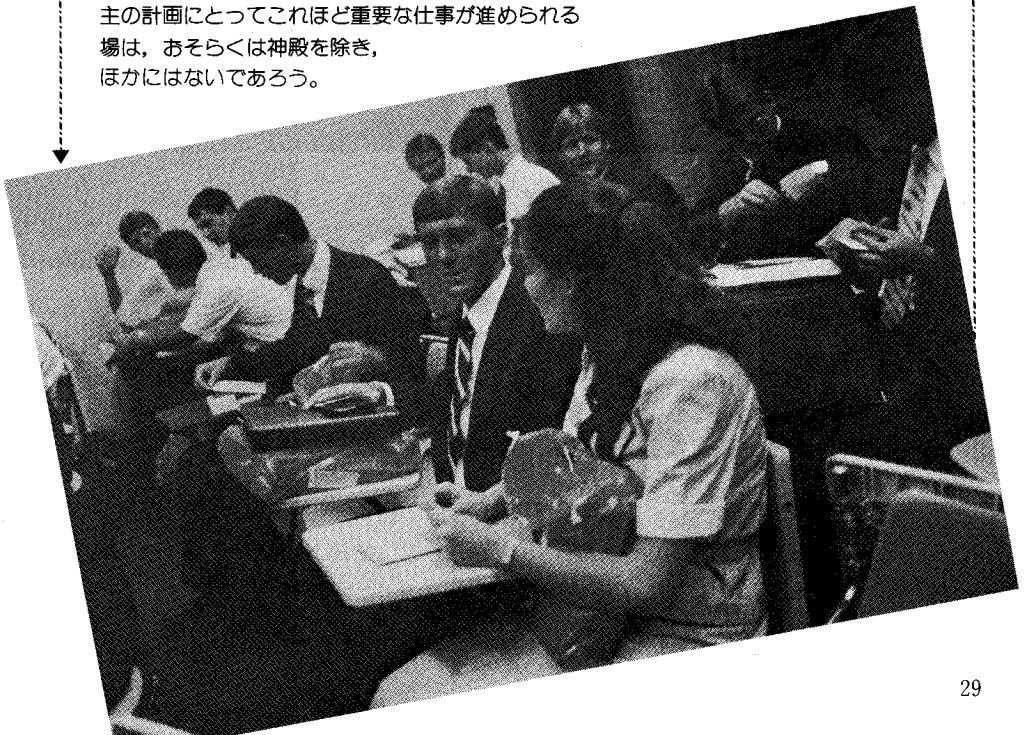
の学習上の得手を突きとめ、それに応じた学習計画を組む。それは、宣教師に画期的な成功をもたらすと同時に、その後の学習に関して生涯に及ぶ鍵ともなるのである。世の最も重要な務めのひとつにいそむ若者たちに最高の訓練を施すことを目指して、MTCの研究は休む間もなく続けられている。

習得の困難を乗り越えて優れた宣教師となった人の例は、枚挙にいとまがない。ほとんど読めない人、学習に適應できない人、レッスンの中身もわからずにMTCを出る人もいたが、伝道地では立派な成功を取めている。学習が極度に困難な人は少ないが、その人たちも立派な宣教師となれるということは励みであろう。体験からして、戒めを守り、勤勉に働くならば、宣教師に失敗

はないのである。

総務部長のアレン・C・オスタガー兄弟は言う。「大勢訪問者があります。ほとんどが教会外の人です。我々のしていることを見学に来られるのです。世の中に出て行く宣教師たちを見て、感銘を受けて、こうした優秀な若者たちをどうやって訓練しているのか、知りたいと思われるわけです。世界各地の大学から、たくさんの見学者が来ています。各州や中央政府やいろいろな国の役人も来ます。ほかの教会からも訪問者があります。ローマのバチカンやナザレ教会からも。バプテスト教会やメソジスト教会の人たちも来ました。言語訓練の様子を見に、軍人も来ましたよ。あるときなど、合衆国の高級将校が5人で来られて、その人たちは軍の言語教育責任者ということで、

主の計画にとってこれほど重要な仕事が進められる
場は、おそらくは神殿を除き、
ほかにはないであろう。





体験からして、戒めを守り、勤勉に働くならば、宣教師に失敗はないのである。

2日も滞在してクラス見学をしたり宣教師と懇談したり資料を見たりされました。最後に、『当地の軍人の訓練をおたくにお願いしたい』という申し出がありましたね。

当然のことながら、それはできかねると返事をしましたら、いろいろ質問されました。まず、来る人だれにも聞かれるのですが、『どのようにしているのですか。何がこの人たちをこのようにするのですか。わかりません』という疑問です。皆さんならば、『証』や『義』『主のみたま』といったことが頭に浮かぶでしょうが、それがこのような方々にはよくわかりません。違いは実にそれなのです。

設備はすばらしいです。訓練システムも立派です。それに伝道の精神と主のみたまが加われば、努力さえするなら失敗するはずがありません。」

MTCの驚異的な成功は、職員に負うところが大きい。少人数ながら高度の教育を受けた熱心な専任職員の指揮下に、600—700名ほどの非常勤教師と地区別調整ト

レーナーが仕事を行なう。彼らの大半は、伝道活動に非凡な才能を発揮した帰還宣教師である。「ここへ来る教師については厳しい人選をしています。」英語教育ディレクターのジョージ・T・テイラー兄弟は語る。「能力があって、意欲的で、実行力があって、しかも証のある男女を望みます。専任職員がごく少数で、パートタイムが非常に多いのです。主の助けをいただいて、こうしたいわゆる『素人の』教師たちが毎日奇跡を行なっているのですよ。」

MTCの職員たちは自分の仕事を「ただのアルバイト」とは考えていない。一様に使命感に燃えている。テイラー兄弟はこう言う。「私はここにいられることを、毎日主に感謝しています。ここで働けることは特権で、名誉なことだと思っています。専任になれるように頑張っているのですが、ここで働かせてもらえるだけでも私にとっては大変なことで、身が引きしめる思いでいます。宣教師たちのために働くことは特権ですし、名誉でもあると思います。自分がそれにふさわしい者でありたいと思います。」福祉活動教育の責任を持つメアリー・エレン・エドモンズ姉妹も、同じ気持ちを語ってくれた。「ここは神聖な場所で、働いてみればそのことがわかります。ふさわしくありたいと心から思います。それ以上にもなりたいと思います。主の僕として召された2,000人の宣教師と勉強しているので、すもの。軽々しくは振る舞えません。主に

油注がれた人々を軽んじたりはできないことです。」

「MTCには見過ごしにできないスピリットがあるのですよ。」テイラー兄弟は言う。「私たちが弱い力でも全力を傾けてなすべきことをしようと努めるとき、事を運ぶ、仕事をやってのけるように人を助ける、そしてカリキュラムや研究開発、訓練を導く大きな力をそこに感じるのです。いつでも目に見えるわけではないですが、自分たちがどこまで来たか後を振り返ってみたときに、このセンターのプログラムを導くしっかりしたみ手のあることがわかります。そんなすごい影響力というものがあるんですね。それが常に私たちを上を押し上げているんです。」

宣教師訓練センターは、聖霊の影響が最も強く感じられる恵まれた場所のひとつのように見受けられる。大勢の宣教師が人には語ることでできない神聖な霊的体験をし、見ることでできる世界とできない世界が密接になって、ときには重なり合うことを証する人が多い。主の計画にとってこれほど重要な、しかも敵の最も不快とする仕事が進められる場合は、おそらくは神殿を除き、ほかにはない。

幸福の基はすべてがここに存在する。義と高遠な目標と愛と。「私はこの宣教師たちを自分の子供のように愛しています。」クリステンセン所長は言う。「本来の道から一番遠い人たちと一番よく心が通じ合えるということがここではよくあります。その人たちにもできるんです。ここで経験することの本質は実に何かと言われれば、宣教師たちに対する私たちの大きな愛と感謝です。」

ほとんどの宣教師にとってそれが楽しい経験であることは驚くにあたらない。クリ

ステンセン所長はこう続ける。「宣教師たちはずいぶんと楽しんでますよ。建物の中を歩いてごらんになれば、楽しそうな彼らに会えます。笑顔で、晴れやかで、自分たちは大切なことをしているのだという強い気持ちがあります。それを楽しんでます。楽しくなければ、福音の原則は生活に生かせませんからね。こんなに幸福なのは初めてだという人が多いのです。毎日そうした言葉を聞きます。」

「一番の願いは、一人一人が福音の証を前より強くして、宣教師という召しの責任を豊かにしてここを発つことです。早くみ業につきたいと心待ちにしてほしい、み業を行なう自信を得て、自分のイメージを高く持ってほしいと願っています。伝道地に着いて飛行機から降りたときに、英語でもそのほかの言葉でも、実際に教えることができるだけの十分な力をつけてほしいと思っています。」

種が芽吹く様子と似ていると思いませんか。妻と私は小さな土地を持っていて、そこにどうもろこしを植えていますが、植えつけの前に発芽させておくこと成長が速いのがわかったんです。いろんな意味で、ここは種が芽を出すようなところです。宣教師がここを出るときは、伝道地という肥えた土壤に植えられる用意ができてはいるはずで、伝道部長夫妻が彼らを受け入れ、その土地に植えて、彼らはぐんぐん成長します。ここで何もかもしているとは毛頭思いません。伝道地でこそ、いろんなことが起きるのだと思います。ここでは芽がまだそう大きくはありません。しかし、実際に芽を出し始める適切な環境を用意してあげれば、彼らはあちらに着いたときに立派に成長してくれると思います。」

ここで芽を吹いた種の実は、世界各地で実るようになる。これから先永遠にわたって、地を祝福する豊かな実りである。

MTCの訓練の内容は次の通りである。

1. 福音の勉強と霊性

福音についての理解力を増し加え、みたまに感じる心をさらに養うことが大切である。言葉と行ないによって福音を教えることができるように、自分たちの生活を整える。具体的には、

- a. 教会の基本的な教義を学ぶ。
- b. イエス・キリストに対する証を強くする。
- c. 良い行ないにつながる信仰を育む。
- d. 祈りと断食を通じて神の助けを求める。
- e. 従順になる。
- f. ふさわしくいられるように絶えず努める。
- g. 人々を愛する。

宣教師たちは、宣教師訓練センターに滞在している間、次のことを行なっている。

- a. できるだけ多くモルモン経を読む。
- b. 宣教師のパンフレット類を読む。
- c. 参照聖句を学ぶ。
- d. 週に一度神殿に参入する。
- e. 教会幹部が話をする礼拝集會に出席する。
- f. 日曜日の定例集會に出席する。
- g. 毎週、支部の集會に出席する。
- h. 支部長のカウンセリングを受ける。
- i. 伝道部大会に一回出席する。
- j. 伝道部長會から指導を受ける。
- k. 神権の儀式的行ない方を学ぶ。
- l. 福音研究のクラスに参加する。

2. 伝道の方法

この訓練により、主が備えておられる人

人を見いだし、彼らに福音を教え、みたまの働きかけによって改宗するよう助け、バプテスマを施して彼らを教会に受け入れる方法を学ぶ。宣教師は次のことを行なっている。

- a. 改宗の可能性がある人々を捜す基本的な方法を学ぶ。
- b. 宣教師のレッスンをういて福音の教え方を学ぶ。
- c. レッスンに関連した聖句を学ぶ。
- d. 愛をもって教える、みたまによって生まれ変わる用意をさせるなどの基本を学ぶ。

3. 個々の進歩

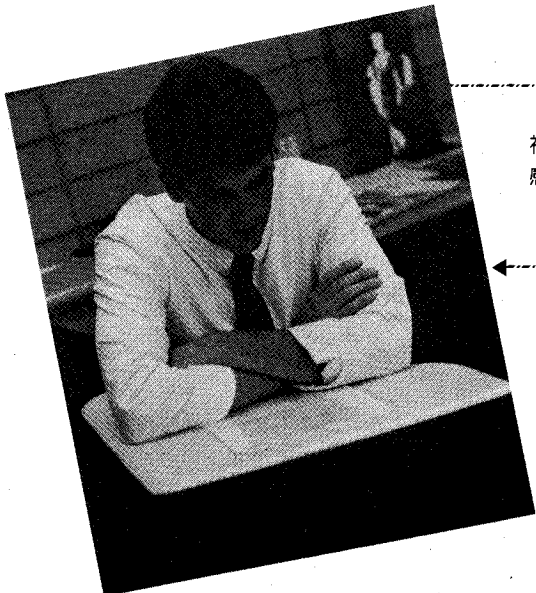
次のプログラムを行ない、自己に対して抱くイメージを高め、心身の健康を図る。

- a. 健康増進・体育のクラスに参加して、体を動かし、力をつけ、耐久力を養う。息抜きに、好きなスポーツを楽しむ時間もある。
- b. 教会使節として一寛容や感情移入、変化に対する適応などの文化の枠を越えた意思伝達の技術を学ぶ。
- c. 具体的な手助けとして一マナー、服装、衛生、栄養、体重コントロール、英語の話し方などの教育を受ける。女性は化粧の仕方や髪の手入れ、立居振舞も学ぶ。
- d. 安全のために一自動車や自転車の安全な乗り方、ガス器具の使い方などを学ぶ。

4. 言語と文化

必要な人は外国語の基礎会話を学ぶ。また、英語を話す宣教師も外国語を学ぶ宣教師も、任地の文化、習慣について教えを受ける。

5. 特別な召しを受けた宣教師の場合



福音についての理解力を増し加え、みたまに感じる心をさらに養うことが大切である。

全員が伝道の召しを受けているが、夫婦と姉妹宣教師の一部は、教会を強め、聖徒たちを整えるための様々な責任をほかに受けることがある。それらの宣教師は次の事柄について学ぶ。

- a. 指導性と教会員の仕事
- b. 福祉活動
- c. 訪問者センター
- d. 広報活動
- e. 伝道本部職員
- f. 系図
- g. 教育
- h. 神殿
- i. 国際伝道部

宣教師訓練センターで教えられている言語

アフリカーンス	北京語
アメリカ手話	ナバホ語
広東語	ノルウェー語
デンマーク語	ポーランド語
オランダ語	ポルトガル語
フランス語	ラトトンガ語

英語（第二言語として）	ロシア語
フィンランド語	サモア語
ドイツ語	セルビア語
ギリシャ語	クロアチア語
アイスランド語	スペイン語
インドネシア語	スウェーデン語
イタリア語	タヒチ語
日本語	タイ語
韓国語	トンガ語
	ベトナム語

業務内容

宣教師訓練センターの業務は多岐にわたっている。訓練プログラム以外に、宣教師の便宜を図る諸施設を持ち、旅行部（毎週何千人という宣教師が世界各地に赴く）、郵便局、コインランドリー、食堂、書店、コピーセンター、体育館、ヘルスセンター、ドライクリーニング店など、さながら一個の宣教師村である。

地域宣教師訓練センター

プロボの宣教師訓練センターのほかに、地域宣教師訓練センターが世界6カ所で業務を行なっている。日本の東京、ニュージーランドのハミルトン、メキシコのメキシコ・シティ、チリのサンチアゴ、フィリピンのマニラ、ブラジルのサンパウロである。ここでは自国語のみで訓練が行なわれ、期間は5日間から14日間である。

名も知らない人

ジェニー・ウルジー・バースガード

ほんの昨晚まで、私は自分を「良い聞き手」だと思っていました。大家族の中で育ったせいで、家ではただ声を小さくして人の話を聞くのを自分の分と心得ていたのです。でも本当は、聞くという行為は単に黙っているだけの行為を意味するものではないことを、昨夜になるまで知りませんでした。きのうまで、人から話を聞いてもらうことを死ぬほど重要なことと考えている人がいるなんて知らなかったのです。

きのうは長い1日でした。私は、ユタ州プロボのブリガム・ヤング大学で学ぶために、昼は学校に通いながら夜はパートタイムで働いています。特に疲れた1日を終え、ぐったりした気分で多少みじめさも感じながら、夜遅く学生食堂へ向かいました。遅い時刻だったので食堂はほとんど人がいませんでした。

お盆を取ってから、どのテーブルに着こうかと思わすと、隅の方にひとりで座っている女性が目につきました。彼女は首をうなだれて目の前の食べ物をじっと見つめていました。テーブルの上には大きなナップサックと本やレポートが散らばっていました。見た限りでは、ひとりでいたいらしいのは確かでした。空きテーブルはいくらかもあるので、私は手近なひとつに座ろうと歩きかけました。

すると不意に、あの女性の隣に座ろうという気持ちが起きたのです。いつも内気な私が、その女性のテーブルに向かって歩き出していました。私は彼女の肩をたたいて、隣に座っていいか聞きました。

彼女は黙って気が進まぬふうにならずき、本やレポートを片づけ始めました。様子や態度やしぐさからひとりぼっちでいたいことがわかるので、私はそんなに凶々しい自分が不思議でした。

それから私たちは話を始めました。はじめは遠慮がちに言葉を選んで。でも、彼女は長く会わずにいた昔からの友達のような不思議な感じがして、彼女について何もかも知りたい、これからどんなことがあるのか知りたいと思いました。私たちはふたりとも気がねなく話をしました。おそらく本当の友達同士より自由に話せたと思います。相手にどう思われるかなど気にする必要もありませんでしたから。

その若い女性は、そのとき起きようとしていたとても悲しいことについて私に話してくれました。私たちは何時間も語り合いました。涙も浮かびました。

数時間たってから、彼女は私を見てこう言いました。「今晚もひとりで座っていたの。この世界にひとりも友達なんていないって心底思ったわ。自分のことを心にか

「良い聞き手」となるためには、頭と同時に心で働きなければなりません。



けてくれる人なんて、ひとりも思いつかなかった。ここに腰かけて、どうやって命を絶とうかと考えていたところへ、あなたがやって来て隣に座っていいですかって私に尋ねたの。あなたが今晚私にしてくださったことがどんなことか、あなたにはわからないでしょう。たった数時間なのに、あなたが私の友達で私のことを心配してくださるってわかるのよ。あなたに親切にしていただいて、神様が今でも私のことを心にかけてくださっているんだってわかったわ。」

そのあと私たちは肩を抱き合い、別々の方角へ別れました。名前も聞かなかったことに気がついて振り返ったとき、彼女の姿は闇の中に消えていました。

私は家に向かいながら、彼女の隣に座ろうという直感を大事にしたことで、自分をほめてやりたい気持ちでした。自分の問題など、彼女の問題に比べればささいな事に見えました。

そのときです。ふいに、同じようにしてだれかに話しかけよう、一緒にいよう、電話をしよう、あるいは励ましの言葉をかけ

ようという気持ちになったときのことが、全部思い出されてきました。よくそうしたささやきを聞きながら、差し出がましいのはいやだとか、疲れているとか、自分の問題で手一杯だとか、様々な理由をつけてそのささやきを聞き流したことが頭に浮かんできました。

そして、はっと考えました。たった今話をした女性のように、重大な問題を持っていた人を、どれだけ自分は無視してきたのかしらと。

本当の「良い聞き手」となるためには、まずみたまのささやきが聞けなければならないということが、私はそれまでわかりませんでした。みたまなしでは、まわりの人々が本当に必要としているものを見分けることはできません。みたまがあってはじめて、頭と同時に心で聞くことができるのです。あの女性には、もう再び会うことはないでしょう。けれど私は、みたまが与えてくださる直感を、これからは決して見逃さないようにしたいと思うのです。

私の兄弟が そこに住んでいます

リー・マホニー

「煙がどこから出てるかわかる？かなり近いんじゃないかしら。何が燃えているのかしら。」

「草が燃えているだけじゃないかな。」

「そんなに近くないわ。あっちの方みたいね。」

「そうだね。どうやら……うちの方じゃないかな。たいへんだ。」

それは私たちの13回目の結婚記念日でした。その晩はほかに約束があったので、すてきなレストランで昼食を取ることにし、5人の子供たちもお祝いに加わっているところでした。やっと料理の注文を終えたとき、子供のひとりが煙を見つけて、お祝い気分はすっかりしぼんでしまいました。我が家の近くではないだろうと話し合いながら、かろうじて昼食を終えました。のんびりしていたのはそれまでで、それからは大あわてで車に乗ると、家に向かって一目散に走らせました。

たった16キロの距離なのに、どんなに遠く感じたことでしょうか。煙に近づくにつれて、だんだん心配になってきました。どうやら我が家の付近から出ているのは間違いないようでした。車を走らせている間にみんなの顔に浮かんだ恐れと心配の表情を今

でも覚えています。

私たちが住んでいた南カリフォルニアでは、乾期の夏が終わると恐ろしい草原の火事がいたる所で起きるのです。我が家は丘の頂上近くにあつて、道路は我が家の前を通つて頂上に通じていました。家の裏手は丘の斜面になっていて、草ぼうぼうの空地が何千ヘクタールも広がり、あちこちに木が群生していました。夏の間に生い茂つた草は雨が降らないために枯れて、カラカラになっていました。そしてその草っ原に火がついたのです。

私は小さな声で短く祈りました。「神様、我が家をお守りください。」

大切にしている財産を安全な所に運ぶのに小さなトラックが1台しかないとなると、人が一体何を価値あるものと考えているかわかって実に興味深いものです。私たちの場合はお金よりも感情の方が先行して、まず第一に運び出したのは家族の記録で、それから多少もてあましぎみではあるが唯一の家具とも言える曾祖父母の音の狂ったピアノでした。娘たちもそれぞれに選んだ宝物を手にワード部の会員の所に連れて行ってもらいましたが、11歳になる双子の息子たちは家のまわりにおいて、ぬれた毛布を屋



根にかけて、水をかけ続けました。

その丘には家が数軒しかなく、しかも互いにある程度の距離をおいていました。さっそく私たちも隣近所がするように、我が家の地所を囲む植え込みや乾いた草を抜き始めました。無駄なことのよう思えても、何かをせずにはいられませんでした。手をこまねいているわけにはいかなかったのです。

「神様、我が家をお守りください。」

火がだんだん近づいて来て、あたりが熱くなってきました。報道陣もやって来て、テレビカメラが向けられたり、夕刊紙にインタビューされる始末でした。

「家が焼け落ちるのを待っている心境はいかがですか。」

「焼けるものですか。」

「まあ、今の気持ちを話してくださいよ。」

「恐ろしいことです。」

警察は長いこと付近の人や車の往来をストップし、住人とごく近い親戚だけが立ち入りを許されました。そのとき、ワード部の男性たちを積み込んだ1台の車がやって来ました。みんな心から助けたいと思ってやって来た人たちで、その愛に深く感動しました。ほかの長老たちも到着して、道路が封鎖されているはずなのに、この善良な人々がどうやって通り抜けて来たのか不思議でした。

私は仲間のひとりに尋ねました。「エレット兄弟、警備陣をどうやって通り抜けて来たんですか。」

「簡単ですよ。私の兄弟がここに住んでいるんですよと言っただけです。」そう言って彼はくすくす笑いました。ほかの兄弟たちもみんなこの手を使って封鎖を通過して来たに違いありません。

数分して長老たちがまたも通り抜けて来たそのとき、若い警官が道路をこっちの方へ歩いて来ました。

「ものすごく兄弟の多い人がいるというので見に来ました」と彼は言いました。

私は戸外に出るとワード部から駆けつけてくれた人たちを数えてみました。39人でした。39人もの兄弟たちです。

39人もの神権者たちがあの手この手を使って消火活動をしてくれたのです。シャベルやくわ、くま手、棒まで持って火を消そうと奮闘していました。手に持つ頼りない道具類に比べたら、兄弟たちの方がはるかに力強く私の目に映りました。私の胸は平安な気持ちで満たされ、どんな火も、戦う彼らの隊列を通過することはできないという強い確信がこみ上げてきました。

大木が炎上するのを見たことがある人は、たとえそれが一本でも数本でも、目と鼻の

先で起きたとしたらどんなに恐ろしいものか想像がつくと思います。天にも届きそうな炎を見つめながらその場に立ち尽くしていました。それから私と私の所有するすべてが荒れ狂う地獄の炎から守られたことに気がつきました。私の心を満たした平安と静けさは筆舌に尽くしがたいものでした。私は何度も何度も自分が教会員であることと享受している福音の知識に感謝しました。涙が頬を伝い、主に感謝を捧げました。物質的なものを守ってくださったことに対してではなく、壊れることのない霊的なものに対してです。

焼けた所と我が家との間にできた大きな溝がブルドーザーで地ならしされ、テレビカメラがニュースになる場面を撮影していました。ブルドーザーを使った区域は、何か突然のことで起こったのでなければ、とうてい火を消し止められるほどの広さではありませんでした。我が家の方向に終始吹き上げていた風が急にまったく向きを変えて、今ではほとんど燃え尽きた場所の方へ吹いていました。もう大丈夫です。火がブルドーザーを使った区域を越えて我が家にやって来ることはもうありません。

「私の兄弟がそこに住んでいる。」彼らはそう言ったのです。

「私の兄弟。」教会員をしっかりと結びつける絆をこんなにも力強く感じたのは初めてでした。それは私の家族を愛し心にかけられるものでした。私たちはひとりではありません。仲間なのです。

夜間に旅をしていて遠くにぼつんと明かりが見えるたびに、そこにはだれが住んでいるのだろうかと考えます。するとあの思い出が私の心を一瞬よぎるのです。「私の兄弟がそこに住んでいます。」

隣の席

七十人第一定員会会員

ジーン・R・クック

すばらしい若い世代の皆さんに心からの敬意を表します。数の上でも質の上でも、かつてないほどにすばらしい方々です。皆さんの良い行ないは枚挙にいとまがありません。その影響は地上での生涯を終えないうちに世界中に広まることでしょう。

このすばらしい若い世代を代表するふたりの若者の話をしたいと思います。わかっているのはその良い影響がもたらした結果のごく一部で、名前すら知らないのです。

1978年の秋のことでした。かりに名前をジェフと呼びましょう。彼は人生にひどく失望していて、教会員の子供として生まれながら、それまでほとんど不活発な状態でした。教会員と結婚したのですが、いろいろなきさつから、数年後には別れてしまいました。そのうえ、肉体的にかなり悪い状態が重なりました。糖尿病からくる片目失明でした。

ジェフは化学工場で夜警として働いていました。同僚は教会員ではないので、しばらくすると彼を誘うようになりました。「なあジェフ、ビールでも飲みに行こうや。」「タバコの1本ぐらいならどうってことないぜ。」「かわいい子を見つけたんだ。今夜は楽しもうよ。」戒めを破る機会はありました

が、彼はどれにも応じませんでした。

金曜日の晩のことでした。失望と孤独に打ちのめされたジェフは、ギャンブルや娯楽場で知られた退廃的な町に住む友人から、遊びに来ないかと誘われました。ジェフはやけになって、行こうと決めました。「それがどうしたっていうんだ。もうだれもぼくのこともなんか気かけちゃいないさ。ぼくは惨めさ。行くぞー。」自分に言い聞かせていたのです。バスに座りながら、これからしようとしている悪いことを考えていました。別れた妻や教会やすべての人々から自分を断ち切ったことをはっきりさせようとしていました。邪悪な思いが強まるにつれ、自分がこれからとるであろう行動が次第にはっきりと頭をもたげてきました。

そのとき、ひとりの軍人がバスに乗り込んできて通路に立ちました。座席はどこでも選べたのに、ジェフの横に腰かけました。その軍人はとても陽気な若者で、「家族」とか「教会」といった言葉を織り込んでジェフに話しかけてきました。ジェフはこの若者が教会員ではないかと思い始めました。軍人はなおもこう尋ねてきました。「私がタバコやコーヒー、お酒をやらないと言ったら、どう思いますか。それに26歳の私が道徳的に清いと言ったら、どうですか。」ジェ

フは驚いた振りをして、「本当ですか」と聞きました。軍人はまた尋ねてきました。「そのことで何か不都合があると思いますか。」ジェフは「いいえ、だれでも自分のしたいようにする権利がありますから」と答えました。それから軍人は福音が真実であることを証し、6年間に15名のバプテスマを施す祝福があったことを話しました。やがて軍人が降りるバス停に着くと、もう一度証をし、バスを降りて雑踏の中に消えていきました。

ジェフは驚きに打ちのめされて、自分に言い聞かせていました。「この私は自己憐憫にひたっているというのに、あの若者は私と同じくらい問題を抱えながらも世の中に積極的に立ち向かっている。私が自分とまわりのすべてに不平を言っているというのに。」そのとき、ジェフには自分が何をすべきかがわかりました。何度も何度も心に誓いました。「自分の人生をよく管理して、今の状態から抜け出してもっと積極的にならなければ。」町に着いた彼は約束していた友人と会いました。しかし、このときの彼はしっかりと自分のことがわかっていました。家にたどり着いたジェフの胸には、信仰を強められた思いと、本当に必要なときに助けてくれる人が与えられたことに対する主への感謝の念に満たされていました。

その若い軍人は、自分が同じ教会員に話しかけていたことなど知るよしもないでしょう。また、彼が主と心をひとつにし、主のみ手の中にある器として、最悪の状態からジェフを救い出したことを知ることもないでしょう。

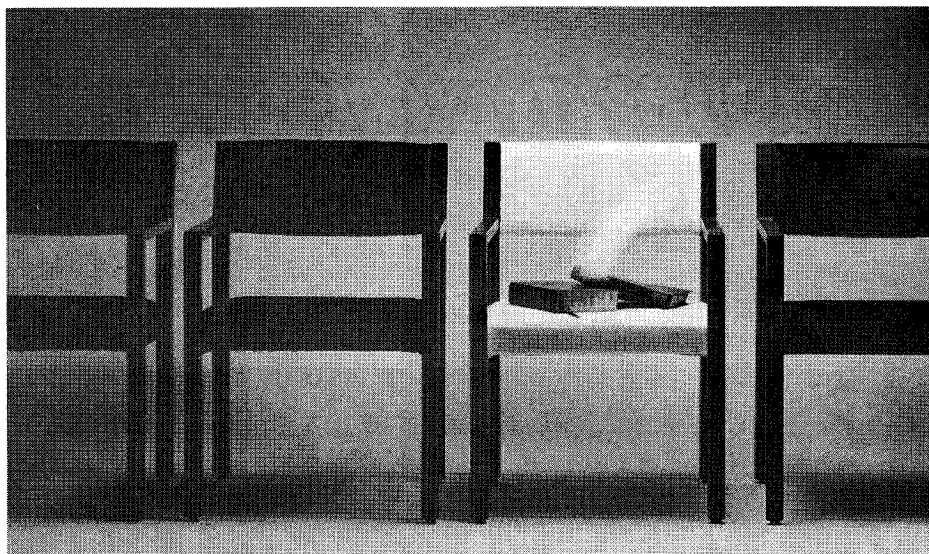
もうひとりの若者は宣教師でした。私がウルグアイ・パラグアイ伝道部の伝道部長をしていたときに、パラグアイのアスンシ

オンの非教会員から私あての手紙を受け取りました。彼の手紙の要旨はこうでした。「ウルグアイのアスンシオンにあるプレジデント・ストロスナー空港で飛行機を待っていると、北アメリカ出身の若い宣教師が私の方に近づいてきました。

その宣教師が伝道を終えて帰郷するところだということが、私にはすぐにわかりました。ちょうどそのとき、その若い宣教師が乗る飛行機の搭乗案内をしているところでした。彼はまさにこの国を去らんとしていることなどお構いなく、少しの時間を見つけて私の横に座ると自分の証を述べ、『知恵の言葉』のパンフレットを私の手元に置いていきました。彼は今まさに帰ろうとしている身であり、伝道を終えようとしているのになぜそんなことをするのか、私には理解できませんでした。彼には私に近づく理由などもうないのに、私にみたまをもたらしてくれたのです。私にはそのことがよくわかりました。

それから私は『知恵の言葉』のパンフレットを読んで、その中に記されているジョセフ・スミスの言葉が真実であると感じました。あんなにすばらしい宣教師がいることをぜひお知らせしたいと思いました。私は彼を通して主のみたまを感じました。私がモルモン教会の会員になれるよう、だれか福音を教えてください方を送っていただけませんか。」

たとえこの世でなくても、次の世でこの手紙の主のことを知ったら、この宣教師がどんな思いをするだろうかとよく考えます。手紙の彼は言うでしょう。「長老、私からわからないのですか。」すると長老は答えます。「わかりませんね。」「長老、もう一度よく見てくださいよ。覚えていませんか。」長老



はきっこう言うでしょう。「いいえ。前にお会いしていますか。」

男の人は話を始めます。「パラグアイのアスンシオンの空港で会ったことを覚えていませんか。あなたが証を述べた相手は私です。あなたがきっかけを作ったんですよ。あなたのことがあって、私はバプテスマを受けました。」ちょっと振り返り、合図をしてから話を続けます。「それから彼女は私の妻です。こっちは私の5人の子供たちで、さらに子供の子供、またその子供たちです。ほら長老、この何百という人間が、あなたのおかげで教会に入ったのですよ。あなたは恐れることなく主の勧告に従ったので、主は祝福してくださっています。『されど汝らの中、或る人々がわが悦ぶどころにあらず。そは彼ら人を怖れて、己が口を開かんとせずしてわが与えたる才能をかくすによる。禍なるかな、かかる人々よ。わが怒りは彼らに向いて燃ゆればなり。』(教義と聖約60：2)「種をまいた」だけだとか、大し

たことではないと考えていたことが、じつは豊かな収穫であったことをいつの日か知ったら、この若い長老の喜びはいかばかりでしょう。

この若いふたりの主の僕がとった無私に行ないは、必ずや天に記録されています。主はこのふたりのことをよくご存じます。彼らはみたまの勧めに喜んで従ったので、ほかの場合でもきつと主のお役に立つことでしょう。

人はどうしても自分の感情や思想、利己的な願いにとらわれてしまうため、主が人に靈感を与えて、主の目的を達成するための器として人を使うことがむづかしくなってきました。

皆さんはすばらしい若人です。歩みを続けて、皆さんの義を人々の前に輝かせてください。主は皆さんを通して奇跡を起こされます。皆さんが常にみたまの導きに耳を傾け、勇気を持って従うよう祈っています。

メリサのパプテスマ

おはなし：ヘレン・E・ケイザー

メリサのおかあさんは、いえじゅうのよごれものを、あつめてまわっていました。おとうさんがかえってくるまえに、せんたくをするのです。おかあさんは、メリサのへやにも^{はい}入ってきて、シャツや、ズボンや、くつ下^はを、ひろいあつめました。そして、へやから出ていこうとしたとき、メリサがいるのに^き気がつきました。

「どうして、あそびこかないの。な



にかあったの。」

メリサはないでいて、なかなかわけをいいませんでした。「わたし、バプテスマうけたくない。」

おかあさんは、メリサのとなりにすわっていいました。「うけたくなければ、うけなくてもいいのよ。でも、いったいどうしたの。」

「わたし、こわいの。」

「バプテスマかいには、まえにもいったことがあるでしょ。なにが、こわいことがあるかしら。それに、おともだちのアンやサラも、いっしょにうけるのよ。」

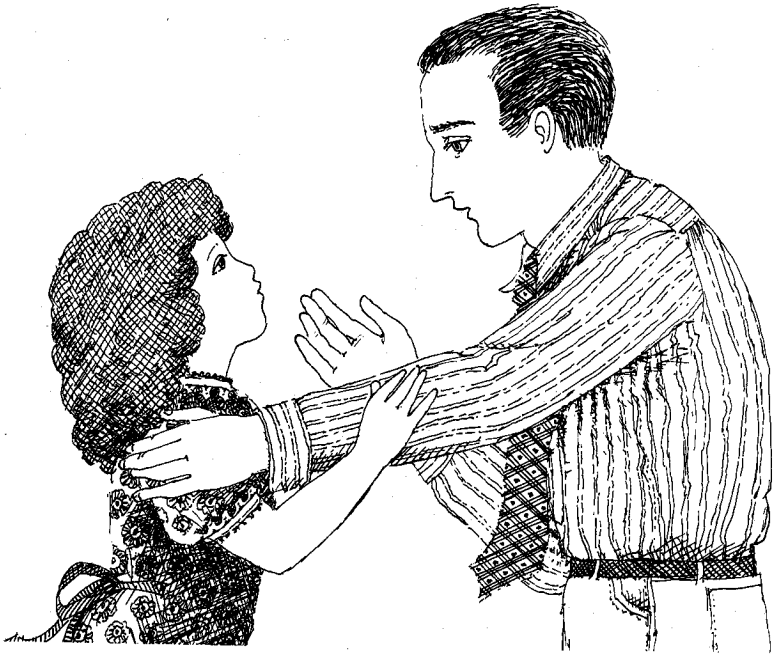
「でも、アンやサラは、わたしとはちがうわ。」メリサは、よわよわしいこえでいいました。「アンやサラは、おとうさんがきてくれて、おとうさんからバプテスマをうけるんですもの。」

メリサのおとうさんは、きょうかいいいんではないので、バプテスマをほどこすことはできません。おかあさんは、メリサがアダムソンきょうだいからバプテスマをうけることを、よろこんでいるのだとばかりおもっていました。「メリサは、アダムソンきょうだいがすきでしょう。」

「^{だい}大すきよ。でも、おとうさんじゃあないわ。」

おかあさんは、メリサをなぐさめようとしてました。おかあさんは、はじめてふくいんをきいたとき、とてもつよいあかしをもち、おとうさんもかならずちかいうちにわかってくれる、とおもいました。それから3年^{ねん}たちましたが、おとうさんは、きょうかいいいんになるとはいつてくれません。そのために、メリサはとてもかなしんでいます。おかあさんがバプテスマをうけたのはまちがいだったのでしょうか。

「メリサはプライマリーがすきでしょう。」おかあさんは、



やさしいこえでいきました。

「わたし、おはなしが大^{だい}好き。先生^{せんせい}も好きよ。」

「先生^{せんせい}からきいたおはなしを、しんじている？」

「ええ、もちろんよ。このきょうかいが、ほんとうのきょうかいだってことも、ジヨセフ・スミスがよげんしゃだったってことも、しんじているわ。」

「メリサがそうしんじていることを、どうしたら、かみさまにわかっていただけるかしら。」

メリサは、おかあさんのいいたいことがわかりました。でも、おとうさんがこないのだとおもうと、やっぱり、こわいのでした。メリサはにっこりわらって、こういきました。「おとうさん、バプテスマかいにきてくれるかもしれないわね。かえって

きたら、たのんでみようつと。」メリサは、おとうさんをまちかまえていて、おねがいしようと、そとに出ていきました。

おかあさんは、メリサのベッドにすわってかんがえました。「あのひとは、きょうかいのしゅうかいにきたことがないわ。かつどうにきてくれたことはあるけれど、ふくいんには、ぜんぜんきょうみをもっていないみたい。」おかあさんは、メリサが、これいじょうがっかりしなければよい、とおもいました。

メリサはおとうさんを見つけると、はしっていきました。おとうさんは、メリサをだきあげていました。「そんなにはしやいで、どうしたんだい。」

「わたし、^じよう^びにバプテスマをうけるのよ。おぼえているでしよう？」

おとうさんは、きゆうにまじめなかおになって、いいました。「おぼえているよ。おかあさんがはなしていたから。」

メリサは、おとうさんのしんぱいそうなかおには^きづかず、こういいました。「おとうさん、わたしのバプテスマかいにきて、おねがい。ほかの子たちは、みんなおとうさんがくるの。」

おとうさんは、なんとこたえたらよいのかわからず、やつのことでこういいました。「そうだねえ、^じよう^びまでにはまだじかんがあるから、よくかんがえてみよう。」

メリサは、がっかりしました。でも、「かんがえてみよう」は「だめだよ」よりもいいとおもいました。

^じよう^びは、よくはれた、うつくしい^びでした。その^びメリサは、おとうさんがいえにいるのをみたので、きつときてくれるのだとおもいました。

メリサは、^びよう^びのふくにきがえました。ドアのうえには、おかあさんがつくってくれた、バプテスマのドレスがかかって

いました。したくができると、おかあさんがいいました。「いきましよう、おくれるわ。」

「うん。おとうさん、よんでくる。」

でも、おとうさんはしごときで、しんぶんをよんでいました。

「おとうさん、したくはできた？ おくれちゃうわ。」

おとうさんは、メリサのしんぱいそうなかおをみて、いいました。「バプテスマかいには、いけないよ。おとうさんは、かいいんじゃあないから。おこらないでくれるかい。」

メリサは、おとうさんのことばをおわりまできかずに、そとへはしっていきました。メリサの^め目からはなみだがあふれていました。

きょうかいにつくと、バプテスマをうける^こ子どもたちは、^お犬はしゃぎでふくをきがえていました。

サラがいいました。「わたし、わくわくしちゃう。パパがモルモンけいをくれたの。ちゃんと、わたしの^な名まえがかいてあるのよ。」

すると、アンがいいました。「あら、いいわね。わたしは、バプテスマかいがおわったら、おばあちゃんのうちにいくの。おばあちゃんが、おぼえのふみをつくってくれるのよ。」

メリサがだまっているの^めを見て、サラがいいました。「メリサは、なにをするの？」

「うーん、わからないけど、おとうさんとおかあさんが、なにかかんがえてるみたい。」でも、メリサはわかっていました。メリサは、ただうちにかえるだけなのです。

メリサは、ハンガーから、しろいドレスをはずしました。ドレスをあたまからかぶろうとしたとき、ピンでかみがとめてあるのに^き気がつきました。おとうさんの^と字です！ メリサはよみま



した。「メリサへ、いかれなくてごめんね。おとうさんは、メリサのことを、とてもじまんにおもっています。メリサは、とても大^{だい}せつなけっしんをしたのです。おとうさんも、いつかメリサとおなじけっしんができるといいな、とおもっています。おとうさんは、メリサが大^{だい}すぎです。おとうさんより。」

メリサはきがえあわって、なみだをふきました。アダムソッキョウだいが、バプテスマフオントのかいだんをおりるのを、たすけてくれました。そのとき、メリサのかあは、いままででいちばんかがやいていました。おかあさんは、3年^{さん}まえきょうかいいんになったのは、やっぱりまちがっていなかった、とおもいました。

カインとアベル

「^{せいてん}聖典からの^{ものがたり}物語」より

この地上に最初にやってきた男の人はアダム、女の人はイブでした。神様はふたりに福音を教え、ふたりは子どもたちにそれを伝えました。しかし、サタンは子どもたちをゆうわくして、言いました。「信じるんじゃあないよ。」大ぜいの子どもたちが、サタンの言うことを聞きました。

アダムとイブには、カインとアベルという息子がいました。カインは大きくなると、両親の教えに反こうするようになり、神様にさからい、サタンにしたがいました。カインがそんなふうだったので、アダムとイブは不幸でした。ふたりはカインをととても愛して、正しい人間にな

ってほしいと思っていました。アダムは神けんを受けていて、カインにもこの大きなしゆく福をあたえました。しかしカインは神けんを大切にはしませんでした。

でも、アベルはじゅうじゆんでした。アベルは両親の教えをよく聞き、神けんを受けて正しく使いました。

やがてふたりは大きくなり、アベルはヒツジかいに、カインはおひやくしろうさんになりました。神様はアベルに語りかけました。アベルは神様を愛し、いましめをよく守りました。

神様はカインにも語りかけました。しかし、カインは神様をあざけて言いました。「わたしが知らなけれ

ばならない神様とは、一体だれなの
ですか。」カインは、神様よりもサ
タンを愛していたのです。

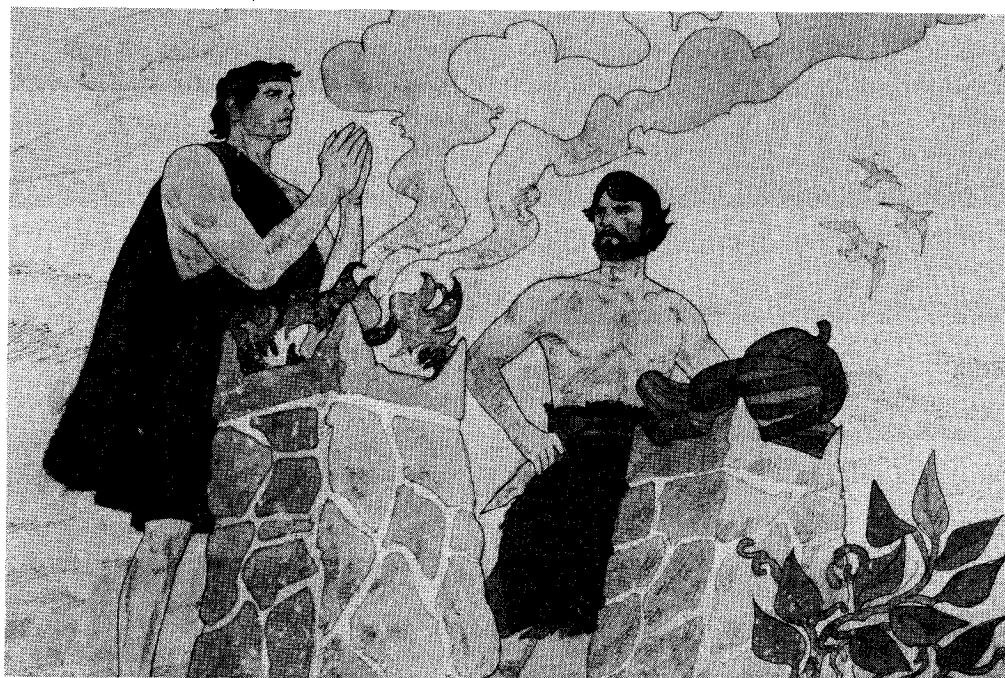
アベルは神様にしたが、ヒツジ
のむれの中から最初に生まれた子ヒ
ツジをつれてきて、いけにえとして
ささげました。アベルは神様を信じ
ていました。そして、神様のおん子
イエス・キリストが、いつかすべて
の人々のために命をささげられるこ
とも信じていました。



サタンはカインに言いました。
「神様にささげ物をささげなさい。」
そこで、カインは自分の畑でとれた
ものを持っていきました。しかしカ
インが神様を信じていなかったため、
神様はそれを受け入れることができ
ませんでした。カインは、神様では
なくサタンにしたがってささげ物
をしたのです。サタンは、カインのさ
さげ物が受け入れられないことを知
っていました。サタンは人に悪いこ
とをさせては、ほくそえんでいたの
です。

カインはささげ物が受け入れられ
ないことを知っておりましたが、
それでも神様はカインを愛していま
した。神様はおっしゃいました。
「正しいささげ物をすれば、受け入
れてあげよう。サタンはお前をなか
まにしようとしているのだ。わたし
にしたがわなければ、サタンのいい
ようにされてしまうぞ。」

しかし、カインはおこって、神様
の声を聞こうとはしませんでした。



カインが正しいことをせず、悪いことばかりするので、アダムとイブはとても悲^{かな}しみました。

カインは、アベルのささげ物^{もの}が受け入れられて、自分^{じぶん}のささげ物^{もの}が受け入れられなかったことを、ねたましました。それに、アベルのヒツジのむれまでねたましく思い、それがほしくなりました。そして、弟^{おとう}のことを考えれば考えるほどにくらしくな

り、いかりはつ^つのるばかりでした。

サタンはカインに悪いことをふきこみ、カインを悪^{あく}の道^{みち}へゆうわくしつづけました。「わたしの言うことを聞いて、だれにもこのひみつをもらさないとちかえ。そうすれば、アベルをお前^{まえ}の手^てにわたしてやろう。」

カインはそれを聞いて、とてもとくいになりました。ほんとうは大きいなるひみつ^{おほ}の主^{ぬし}マハんだ。わ

たしはあいつを殺して、ひともうけるのだ。」

カインは野原へ行って弟を見つけ、話をしているあいだに弟を殺してしまいました。

カインはサタンを信じていました。ですから、弟を殺したことはだれも知るはずはないと思っていました。

しかし、神様はカインのところへ来ておっしゃいました。「弟アベルはどこにいますか。」

カインは答えました。「知りません。わたしが弟の番人でしょうか。」

神様はもう一度おっしゃいました。「あなたは何をしたのですか。あなたの弟の血が土の中からわたしにさけているのですよ。あなたはろいを受けるでしょう。」

サタンはカインにうそを言ったのです。カインは自分のしたことを神様が知っていることに気づき、だれかほかの人のせいにしようと思いました。「サタンがわたしをゆうわくしたのだ。」

神様はカインにおっしゃいました。

「わたしのもとから出ていきなさい。あなたは地上をにげまわり、さまよい歩くようになるでしょう。」

カインは神様に言いました。「こんなばつは、重くて負いきれません。わたしは、あなたのもとから身をかくします。わたしは人に見つかれば、殺されるでしょう。」

しかし神様は、カインが殺されることをお望みにはなりません。神様はカインにしるしをおつけになり、だれもカインをきずつけてはならないことがわかるようにされました。

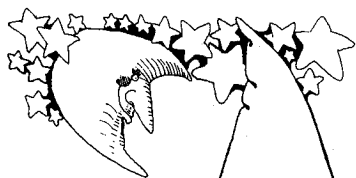
カインは、神様のみ前からおい出されるといふばつを受けました。カイン、カインのつま、そして大ぜいの兄弟たちがアダムとイブのもとをはなれ、ノドの地に行ってくださいました。

(この物語は創世4：1-16とモーセ5：16-41に書かれています)



ハロウィーンの

10月31日のハロウィーンには、子どもたちがおばけの^{かつ}かっこうをして、家々を^{まわ}り、おかしをもらいます。こわいかおのジャコランタン（ハロウィーンの^{ちやう}ちん）も^つ作ります。ふつうはカボチャやスイカで^つ作りますが、紙^{かみ}ぶくろでもできます。みんな^つで^つてみましょう。



てんむすび

1から46まで、じゅんばんにてんをむすんでみましょう。



ジャコランタン

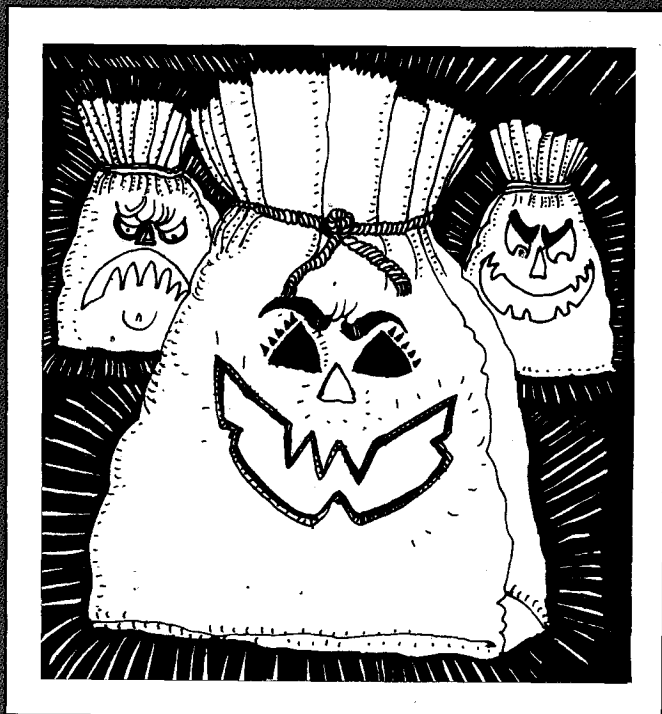
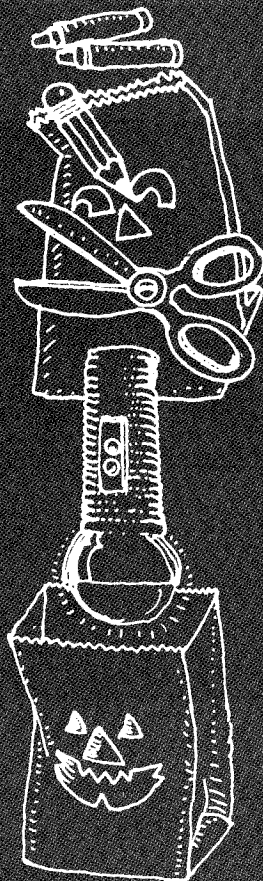


つくりかた

まず紙ぶくろにこわいおをかきます。
つぎに、目、はな、口を切りぬぎます。
それから、かい中電とうをさかさまにして、
ぶくろの中に入れ、ぶくろの口をしぼって、
わゴムでとめます。これでできあがり。

よいするもの

紙ぶくろ
ハサミ
ラッショペン
わゴム
かい中電とう



菊地良彦長老、2年振りに里帰り

▷…2年振りに夏の休暇でアメリカから家族と一緒に里帰りをした七十人第一定員会会員の菊地良彦長老は、なつかしく日本の教会員と再会をした。また東京、横浜、名古屋地区のファイヤサイドに出席し、アメリカでの家族の様子や教会幹部としての経験、これまでの半生の証を述べ、集った人々に深い感動を与えた。

アメリカに帰国する前日の7月29日に行なわれた横浜地区のファイヤサイドには、横浜ステーキ部と町田ステーキ部の教会員および地区代表の田中健治長老、柏倉仁長老、相良健一長老が出席した。東京ステーキ部設立当時のステーキ部長会の顔ぶれが並び、一昔前にタイムスリップしたような感があった。



●横浜ワード部で行なわれたファイヤサイドでお話する菊地良彦長老

天父のもとへ帰る備え

— 霊性を高め勇気を持って —

末 日聖徒イエス・キリスト教会に私たちが入らせていただいていることは、偶然ではなく、神様のひとつの摂理に基づいて行なわれていることです。イエス・キリスト様ご自身のお名前を頂戴したその教会にお入りになっておられる皆さんは、なんとすばらしい、恵まれた人たちでしょうか。

この教会が最も神聖で真実の教会である証拠がひとつあります。それは、この教会がいつでも靈感によって、みたまによって導かれている教会であるということです。人はそのみたまの導きを決して軽んじることはできませんし、ごまかすこともできません。

私たちは毎日、霊性を高め、霊を磨き、

七十人第一定員会会員
菊地 良彦

霊の力を蓄えるような生活をする必要があります。

どのようにしたらそのような生活をするができるでしょうか。いくつかの例をあげてお話ししたいと思います。

私たち家族がアメリカに引っ越して買求めた家は16年もたった古い家でした。私と妻は何カ月間も毎日ペンキ塗りをしました。カーテンのデザインやカーペット、壁の色に至るまで、全部私たちふたりで決めました。

それが全部終わってから、家に備える家具を見に行き、ひとつの特別な椅子を買いました。それは、ひじかけと高い背もたれのついた柔らかい、真っ白い椅子でした。

それからしばらくして、ある家庭の夕べ

で息子が「上のリビングルームにある白い椅子はお父さんの？」と尋ねました。「いいえ」と私は答えました。「それじゃお母さんの？」「いいえ。」ほかの子供たちも一緒になって、「監督さんかステーク部長さんのかな？」「いいえ。」「それじゃ、キンボール大管長が訪問して下さったときに座っていたか？」「いいえ。」ずっと「いいえ」が続き、子供たちはもうだれのための椅子か、質問を考え出すことができないようでした。そのとき、一番下の娘が、「イエス様の座る椅子？」と尋ねました。

私は何と答えていいのかわかりませんでした。その通りだったのです。

「お父さん、イエス様は僕の家に来てくれるかな。」末の息子がまたそう尋ねました。

私は同じ質問をきょう、皆様一人一人にしたいと思います。皆様の心の中に、イエス様をいつでもお迎えできる真っ白い椅子を、特別席として用意していらっしゃるでしょうか。

兄弟姉妹の皆さん、私たちがこの教会に集っているのは、たったそれだけの目的です。イエス・キリスト様、そして天のお父様にいつでも、どこでも、どんなときでもお会いできるように、準備することです。

もうひとつの経験を申しあげたいと思います。

あるとき、ほかの教会幹部と会議をしているときに、ベンソン十二使徒会長から緊急で、ある問題を処理してほしいとの電話がありました。私は会議を中座して、すぐに車である姉妹の家を訪問しました。

この姉妹は神殿で結婚された帰還宣教師でしたが、ご主人とうまくいかずに家出をし、知らない旅人と間違いを犯してしまいました。みたまを欺くことはできません。その姉妹もその原理をよく知っていました。家に帰って自分の夫にその罪を告白し、ふたりは泣いてお互いに赦し合いました。

そしてふたりで監督のもとへ告白に行き、始めからやり直したいという彼女の希望を述べ、教会を破門されることになりました。彼女は4年間準備をし、再びバプテスマを受けました。しかしすべての神殿の祝福と夫の結び固めの祝福を回復する途中で、彼女の肉体に悪性の腫瘍である癌が発生していたのです。その電話をいただいたときにはもう体中に癌が転移し、治る見込みもないほどでした。

起きあがることもできない彼女にいろいろと質問をしている間に、泣きながら答える彼女が本当に悔い改め、心からの準備ができていたことをみたまによって強く感じました。

私は寝たまの彼女の頭に手を置いて、彼女がかつて受けたすべての祝福を差しあげました。とても強いみたまを感じ、私はどのようにして最後のアーメンを言ったのか覚えていません。彼女はぜひ立ちあがりたいと言って自分で起きました。ひどく咳込んで、血を吐きました。

彼女は目に一杯涙を浮かべて、しっかりとベッドのパイプをつかんでこう言いました。「私は長い間、このときを待っていました。私はきょう、とても清められました。私はきょうをもって、天のお父様の所へ帰

る準備ができました。もう帰れます。」

私は彼女に、体が快復して天のお父様のもとに行くことができます、と再び祝福をしてその家を去りました。

車を運転している間、私は涙が出て止まりませんでした。「菊地兄弟、あなたはこの姉妹と同じように、今、天のお父様にお会いできる準備ができましたか？」と尋ねました。

私は皆様に証いたします。つまらない私ですが、その幾分かの準備が整っている自分を見ると、私は神様に感謝しました。

兄弟姉妹、あなたは今、その姉妹のように「私は本当に清くなりました。私は天のお父様のもとへきょう、帰る準備が整いました」と過去形でおっしゃることができるでしょうか。

私は心から皆様に証いたします。私たちはそのような、神聖な永遠の目的があつてこの教会に集っています。あなたと天のお父様の関係はいかがでしょうか。御子イエス・キリスト様とあなたの関係はいかがでしょうか。

3カ月あとに私は彼女のお姉さんから手紙をいただきました。「お医者様に2、3日で亡くなると言われた妹の体が長老の祝福をいただいてから急激に良くなり、家族は奇跡が起こったと信じていました。朝早く起きて聖典を読み、散歩に出かけるほど元気になりました。でもつい一週間ほど前、風邪をこじらせて愛する妹は神様のもとに去っていきました。彼女は自分が望んでいたすべての目的を達し、子供とも結び固められてこの世を去ったのです。」

人がこの世を去るときに最も神聖な宝として持ち帰ることができるものは何でしょうか。それは、天のお父様やイエス・キリスト様と自分との正しい関係です。そしてまた、愛する自分の家族や兄弟姉妹との関係です。

そのような美しい関係を築くために、私たちは今この道に歩んでいます。これだけの目的です。そのような関係を私たちが日々の生活の中で天のお父様と、御子イエス・キリスト様と持つことができたら、私たちは世の中で一番幸せな人間です。そのような人たちの生活は、まじめで清い、美しい生活です。そしてその人の霊性はどんどん強くなり、力がついてきます。その人の神様への思いは強くなります。すなわち、神を愛する気持ちと神をお慕いするその人の霊性はどんどん強くなっていくのです。

しかし、悪魔も生きていますから、ちょうど公害が私たちの生活を侵食するように、私たちが気をつけていないと、どんどん世の悪に染まってしまいます。私たちはいつでも、謙遜に、謙虚な気持ちで神様の教えを守り、霊のことにに関して敏感に感じる力を持たなければなりません。

それには何が必要でしょうか。皆さんはけさ、自分の膝を曲げて天のお父様と交通をなさいましたでしょうか。天のお父様にお祈りをされたでしょうか。

ペリー長老はこう言われました。「祈りは天父との神聖な交わりの一のときである。」

またあなたはけさ、聖文を一節でもお読みになりましたでしょうか。謙遜に自分の思いをへりく다らせて、聖文を熱心に祈り

の気持ちで学ぶことは是非とも必要でございます。

デビッド・O・マッケイ大管長はかつてこうおっしゃいました。「私は朝早く起きて身を清め、新しい布をまとい（すなわち、神殿に入っていらっしゃる方はガーメントを意味します）主のみ前にみづからをへりくだらせ、主の靈感を待つ。」

このような生活は是非とも必要です。そのような生活をしている人には、必ずみたまが共にあって励ましてくださいます。

教義と聖約109章のジョセフ・スミスがカートランド神殿を献堂した祈りの言葉に次のようにあります。「また彼ら父の中において成長し、聖霊の完全なる恩恵と能力とを受け……」私はこの言葉が大好きです。英語では *fulness of the Holy Ghost*, すなわち、聖霊が持っているすべての約束、聖霊の持っている完き祝福まつたを享受することができるその力を天のお父様は私たちに約束してくださっているのです。これは、世の何にも代えがたいすばらしい祝福です。

兄弟姉妹の皆さん、私はアメリカに住んでいるために直接できない、特別なお願ひがあります。

ある宣教師は、準備の日にもかかわらず伝道し、夕暮れにアパートに帰ろうとバス

停に向かいました。しかし、神様の戒めを守っている人には神様は必ず導きを与えられます。彼はバス停に向かうその足がどうしても重く、やがてバスを待つ間に、もう一度ひき返して伝道を続けるようにという強い気持ちを感じました。そして同じ場所に戻り、そこである少年に出会いました。それ以来その少年の人生は完全に変わり、今日に至るまでずっと教会に行き続けています。皆さんと同じように、努力し続けています。その少年とは今皆さんの目の前に立っている私なのです。

時が遅くなってしまわないうちに、刈り入れの夏が過ぎ去ってしまわないうちに、日本人の同胞が福音を受けられる機会を与えてあげていただきたいのです。私を捜してください。くださった宣教師のように、みたまの導きで、もうひとりの菊地良彦を、そしてもうひとりのあなたを捜すことができるように。そのような準備と勇気を天のお父様が皆さん一人一人に与えてくださいますように。

神がまさしく生きたもうことを、イエスがキリストであって、私たちの罪を贖ってくださいたことを証いたします。神の予言者であるキンボール大管長やまたキンボール姉妹は人を愛するために疲れ切ってしまうまでに頑張っておられます。私たち若い者はもつともつ頑張らなくてははいけません。

皆様の上に天のお父様のあふるる祝福が与えられて、皆様が幸福で安全な、永遠の道を熱心にいそしまれますように。イエス・キリストのみ名によりお祈りいたします。アーメン。(横浜ワード部で行なわれた7月29日のファイヤサイドでの話を要約)

●日本の教会員と再会を喜ぶ菊地長老ご夫妻





私の疑問に解答を与えてくれた「聖徒の道」

一子供に高い人格を形成する基となる宗教心を—

横浜ステーキ部横浜第2フード部
東京工業大学工学部助教授

宮内 敏雄

●宮内ご家族(中央)
と宣教師

宣 教師の訪れを受けたのは今年の1月でした。初めは妻だけがレッスンを受けていましたので、モルモン経を手にしてもすぐにその内容を理解することはできませんでした。しかし宣教師からいただいた「聖徒の道」を読み始めたとき、モルモン経とこの教会に対する私の考えは大きく変わりました。平和を希求しているのに平和を保つことが困難なのはなぜか、不幸な結婚を望む人はいないのに、なぜ離婚に至るのかなど、私の抱いていた疑問がこの「聖徒の道」を読むことによって氷解していきのわかりました。

また、どういった人々がこのような本を出版しているのだろうと思いました。そこでその信仰の基礎となっているモルモン経を読み始めましたが、神様と人々との交流、イエス・キリストの福音と復活、神様の示された道を歩むことがいかに困難であるかなどを知ることができました。

そのように神様やイエス・キリストを信じる人々に会ってみたいと考え、2月末に妻と一緒に初めて教会を訪れました。日曜学校で、監督さんから「私たちは神の霊の子供たち、すなわ

ち兄弟姉妹であり、現世は私たちが霊的に成長できるように設けられた場である」とのお話を伺いました。

教会で学んだ事柄を基に「教義と聖約」や「高価なる真珠」を読み進んでいくうちに、これまでひとりで聖書を読んでいたときにはわからなかった部分が十分理解できるようになってきました。特に新約聖書の福音書を読んだとき、イエス・キリストが奇跡を行ない、人々を愛し、罪を贖われるために十字架にかけられ、復活された様子が今までになくありありと心に迫り、イエス・キリストが神の御子であると信ずることができました。

また旧約聖書の創世記、出エジプト記、レビ記と読み進むうちに、神様が生きておられ、アブラハム、イサク、ヤコブに語りかけられ、モーセと実際に会われたことを信ずることができました。そしてこのように聖書を信ずるならば、ジョセフ・スミスが神様とイエス・キリスト様に会われ、神権を受けて教会を回復されたということ信じざるを得ませんでした。

何度か教会を訪問するうちに、監督さんからバプテスマを受けることを勧められ、改宗につ

いて真剣に考えるようになりました。

この教会が神様の真実の教会であることがよくわかり、何の不安もありませんでした。そして私の実生活における神への信仰に関する次の3つの点からバプテスマを受けようと決心するに至りました。

その理由のひとつは、私たちの子供に何を残してやれるかを考えたからです。お金を残しても、それをあてにしてろくな生き方はしないでしょ。教育を残し、知識ばかり豊かになっても、人格を伴わなければ偏った人間になってしまいます。それよりも宗教心のような高い人格を形成する基礎となるものを残してやりたいと思いました。

次に、私は現在、研究と学生の教育に携わっておりますが、単なる知識の切り売りだけでは学生を本当の意味で教え導くことはできません。学生一人一人の人格の向上を図り、卒業してから社会人として立派に生活できるようにする必要がありますが、そのためには教育する側の人格が大きな問題となります。

また、これまでの研究生活の中で、私はみたまの導きとでも言うべき大きな力をすでに何度か感じてきました。精神的に充実していないときには、いくら時間をかけても正しい答えに到達することはできません。あたかも「常に学んではいるが、いつになっても真理の知識に達することができない」(IIテモテ3:7)という状態になるわけです。ところが導きがある場合には、非常に短い時間で正しい答えに到達することができるのです。このような一個人の力を超えたものが一体何であるか今まではわかりませんでした。しかし、それが神様からのものであるならば、その導きと恵みを願い、またそれに対して感謝したいという気持ちになりました。

こうして、今年の5月6日にバプテスマを受

けました。この頃は毎週教会に集うことが楽しく、特に週の後半になると安息日が待ち遠しい思いがしています。それはおそらく、教会で霊的な充実感が得られるからだと思います。

今後、聖典を通して少しでも深く福音について知ることができるように、また、その福音を少しでも実生活に生かしていきたいと願っております。

私たちをこの教会に導いてくださった吉原長老とケイブナー長老に心から感謝いたします。また私たちを温かく迎えてくださった浅間ステーク部長、西條監督、田中長老をはじめ、横浜第2ワード部の兄弟姉妹の皆様にも深く感謝いたします。(みやうち・としお 1947年生まれ、横浜第2ワード部日曜学校第一副会長)

「先祖についての 教会の教えに驚き、 一度に興味を 持ちました」

横浜第2ワード部 宮内 有子

私の実家は特に宗教を持っているわけはありませんが、先祖をととても大事にしており、私も小さいときから先祖に手を合わせる習慣がありました。そのせいか、人には信じてもらい難い霊体験も何度かあり、霊界は必ずあるものだと確信していました。

結婚後、聖書研究をしている方から聖書を読むことを勧められました。読んでみると本当に価値ある本だということがわかり、もしこの聖書の神が唯一神として今も存在しておられるの

なら、私の中にある問題や疑問の多くは解決されるのではないかと思いました。ただ、先祖霊の存在を信じていた私にとって、そのことについてのはっきりとした答えを聖書から得られなかったのです。

その聖書研究の方々には、先祖崇拜は偶像崇拜につながるものであり、霊体験に至っては、はっきりサタンの仕業だと言われました。先祖を大切にすることは決して悪いことではないと思っていましたし、彼らの伝道に、私の願うところの神のおおらかな愛を感じとれず、結局受け入れることができませんでした。

けれどもそれ以来、それまで漠然としていた「神」の概念を、聖書の神に焦点を合わせていくことができたのです。いろいろな宗教や教会の方々からお話を聞く機会もありましたが、それらの頭に立つ方が人間である限り、過ちを犯すでしょうし、どこか内部に問題や悪が見られるもので、そういう組織化されたものの中に入るのには絶対やめておこうと決めていました。

教会に入らなくても、もし神様が本当にいらっしゃるならば、こんなちっぽけな私の願いでもどこかで聞いてくださることもあるかもしれないと思い、「神様……」と語りかけ、祈ることを始めました。ちょうど2年程前のことです。たとえ一方通行の祈りでも、日々感謝し、反省し、神様の導きを願うことは、私にとって有意義なことだと、ひとり納得していました。もちろん、本当に神様の教会がこの地上に存在するなんて思ってもみませんでしたし、まして自分がそこに導かれるなどは夢にも考えていませんでした。

吉原長老とケイブナー長老はとてすばらしい宣教師でした。宗教団体には入りたくないという気持ちから、初めは家に上がってもらうことさえためらっていたのですが、大雪の日に門

口に立たれたおふたりにとても誠実なものを感じ、お話を伺うことにしたのです。

神様のことは少しでも知りたいと思っていましたし、また気になっていた先祖についての教会の教えに驚き、一度に興味を持ちました。今までどうしてもわからなかった疑問がスラスラと解けていき、とても楽しいレッスンでした。そして、教会に行き、愛に満ちた兄弟姉妹にお会いしたとき、この教会が本当に神様の教会であるとわかりました。

また、田中健治長老が初めて私たちの家を訪問してくださったとき、後で夫が「たとえ明日僕が死んでも、あのような方になら安心して子供を託すことができる」と申しました。教会員の方々の言葉による証ももちろん大きなものですが、私たちを決心させた一番大きなものは、そうした無言の証でした。また、それまで夫が信仰を持つなど考えられないことでしたが、その夫が神様を受け入れたという事実も、私に迷わず道を選ばせました。

時がたち、神様の愛をより深く知るにつれ、神様が私の祈りに応えてくださったのだと確信することができるようになりました。ジョセフ・スミスが純粹な心で熱心に神様に祈り求めたとき、神様と御子の訪れを受けた示現について、私は、方法も知らない拙い祈りでさえ一方通行ではなかったという自分の体験を通して、それが真実であるとわかります。

私は十分すぎるほどこの世的な人間でしたし、今でもよく、ふっとなぜこの道を歩き始めたのかわからなくなることがあります。でも、そこに自分の力だけではない大きなものの介在と愛を思い出すとき、踏みはずしてはいけない、戻ってはいけない、と心を新たにしますのです。(みやうち・ゆうこ 1953年生まれ)



教会堂の 管理人となって

—神様の祝福と
愛を感じます—

名古屋ステーキ部
岡崎ワード部

三浦 康資

19 78年3月、ヤングメンズファッションの
最大手メーカーが、突然倒産しました。

私はその名古屋支店で働いておりました。私にとつてはとても好きな会社で、その商品や、個人の社員たちの生き方に対してとても誇りを持っていましたので、これはとてもショッキングな出来事でした。

しばらく何もする気が起きませんでしたが、会社の同期の友人と一緒に、新しいタイプのスポーツショップを開く計画を立て、当時アメリカに住んでいた友人からアメリカの商品情報などを取り寄せ始めていました。

9月末のある日、私にしては珍しく家族に食べてもらおうと、朝からボルシチというロシア・シチューを作っていました。火加減を気にしながら料理の味見をしていると、ふたりの日本人宣教師が我が家を訪問して来ました。無神論者であった私は、話には興味がわきませんでしたが、宣教師がおもしろそうな人たちだったので、友達になりたいと思い、翌日レッスンを受ける約束をしました。

私は決して良い求道者とは言えず、宣教師に対して、宗教界の矛盾や地上の不公平さについて話したり、神は存在しないと抵抗したりして

いました。宣教師は、様々な話を2時間以上も忍耐強く、いやな顔もせず付き合ってください、時計を横目で見ても「そろそろレッスンをしてもよろしいでしょうか」と、短いレッスンがいつも始まるのでした。お祈りも、「信じてもないのに……」と苦痛を感じながらお付き合いの延長としてしぶしぶ行なうという状態でした。

あるとき、宣教師が「一生懸命にお祈りしてみてください。そうすれば神様が生きておられること、この教会が真実の教会であることが必ずわかります」と言いました。私は宣教師を負かすのはこのときとばかりに、「一生懸命祈っても何も感じなかった。だから神様はいない」と言ってやろうと、真剣に祈り始めました。

数回続けたところ、高慢な態度と不純な気持ちで祈り始めたにもかかわらず、答えを受けたのです。私の方が負けてしまいました。

バプテスマを受けるまで、戒めを守ることを含め、いろいろなチャレンジがありました。たとえば、私たちの計画していた店は日曜日にも商売をする予定でした。定休日を日曜日にしなければいけません。そのことを一緒に店を持つ予定だった友人と話し合うつもりでしたが、その頃から彼とは連絡がとれなくなってしまい、結局この店を持つ話は流れてしまいました。

もうひとつ大きな問題がありました。妻の両親が教会に入ることに反対だったのです。12月24日のバプテスマ予定日のぎりぎりまで受けられるかどうかもめていました。23日の夜お祈りをしたとき、すでにいろいろ助けていただいていた当時の伝道部長の田中健治長老に従うようにと答えを受けました。

その日は遅かったので、翌日早く伝道部に電話をしてみたところ、伝道部長ご夫妻は津支部に予定があつてすでに出かけられたとのことでした。私は、もうだめだ、バプテスマを延ばし

てもらおうと思い、約束の時間より早く教会へ行きました。すると、そこにはなんと田中伝道部長ご夫妻がおられ、私たちと会うなり「三浦兄弟姉妹、きょうバプテスマを受けなさい」とおっしゃったのです。私たちは、ただただ喜びで涙を流すだけでした。

その頃、岡崎ワード部の教会堂は、建てられたばかりでとてもきれいでした。当時の私はまだ無職で、悶々とした日々を過ごしていました。いろいろとアルバイトもしましたが、持っていた貯金は生活のためにすべて切り崩してしまいました。ホームティーチャーから紹介をいただき、ある会社に就職することができました。しかし、しばらくすると取り引き先とは問題はなかったのですが、会社の接待に対する指示と戒めとの相違による問題や会社の将来性に対する不安がつってきました。

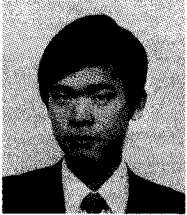
昨年3月号の「聖徒の道」にも載りましたが、岡崎ワード部の管理人をされていた阿南兄弟が1982年暮れに交通事故で亡くなり、当時の小森監督は管理人になる人を探していました。最初は冗談で「もし人が見つからなかったら、私がやりますよ」と言っていたのですが、そのうちに真剣に考えるようになりました。そして小森監督に「もしふさわしい人がまだ見つからないのなら、私も候補に入れてください」とお願いしました。

引き継ぎがなかったため、また未経験な仕事内容でしたので、最初の頃はひどい状態でした。管理人になって2日目、屋上で水が流れる音がするので上ってみると、配水管が破裂しており、水が勢いよく流れていました。あわてて止水栓の場所を知ろうと凶面を必死で探してもまるでわかりません。やっと見つけて水を止め、業者に連絡しようとしてもどこの業者に電話をしてよいのかかわからず、四苦八苦しました。1日が

それで終わってしまったのです。また床を磨こうとしても、ポリッシャー（床磨き機）を思うように操作できず、全フロアを磨くだけで1週間もかかるという有り様で、妻の助けなしでは教会をきれいにすることができませんでした。草花もいじった経験がないので、種を蒔いても花が咲くまで育ってくれないのでした。今では「管理人セミナー」によって知識も増え、いろいろな技術を身につけて、少しずつ成長してきたつもりです。

管理人になって一番印象に残っているのは、やはり昨年11月13日に行なわれた献堂式です。まだ管理人になってから半年過ぎたばかりでしたので2回目とはいえ床ワックスの全面剥離をどう行なえば手際よくできるのか悩みました。献堂式までの期間が短かったのですが、名古屋地区の管理人の方々のお助けや、岡崎の教会員のアドバイスや奉仕によって、ワックス塗布、ペンキ塗り補修、照明器具の清掃など、教会堂を主に捧げる準備をすることができました。特に教会員の方々との経験はうれしいものでした。そしてバプテスマを受ける少し前に建てられた教会堂が、私と一緒に歩んできたような気持ちもあり、感無量でした。

多くの宣教師たちや求道者の方々、また安息日に集わなくなり、ときどき訪問してくださる教会員と話す機会があります。このような人々と接したり、草花をいじったり、教会堂の維持管理をしていますと、神様の祝福や愛をよく感じることができます。このような経験ができますことを本当に感謝しています。これからも管理人としての知識や技術を積極的に身につけ、献堂された岡崎の教会で、皆がみたまに満たされやすいように、維持管理できるよう頑張りたいと思います。(みうら・やすよし 1950年生まれ、岡崎ワード部長老定員会会長)



「それは幸福になるためです」

—福音を楽しむことについて—

東京ステーキ部三鷹ワード部 芥野 正己

当時私は、札幌伝道部で専任宣教師として働き始めて1カ月半ほど経過していました。その1カ月半の勉強で宣教師のレッスンプランは大体頭に入っており、また専任宣教師に召される以前から、教義に対する知識的な面では多少自信がありました。ですから自分としては経験がまだ未熟でも、求道者の疑問に対しては理論的に答えられるはずだと自負していました。

そのとき同僚と私は、40歳くらいの立派な、学識も豊かなご主人に教えていました。まだ宣教師として目の浅い私は当然後輩でしたが、かなりむずかしい単語を交えての会話は外人の同僚には大変らしく、求道者の質問に答えたりするのは大部分は私の役目でした。

話し合いの中で、そのご主人は私たちにこのように尋ねられました。「あなたがたの信じている教えでは、生きている目的をひと言で言うとは何ですか。」

ほんのわずかですが、私は答えるのに躊躇しました。救いの計画の概念はいつでも述べることができます。しかしひと言では……。数秒の思慮のすえ答えを見いだし、自信を持ってこう言いました。「それは神様のもとへ帰ることです。」

この私の言葉に対してそのご主人は、「それは宗教的な言い方ですね。私にはわかりにくいです。もっとだれにでもわかる言葉をお願いします」と言われました。

私は自信を持って言ったことだったのでショックでした。すぐにもっとわかりやすい言

葉を見つけなければなりません。

思案する私の脳裏に浮かんだのは、第二ニーマイ2章25節の「人類が現世に在るのは幸福を得んためである」という聖句でした。私はこの言葉を使って、先ほどの質問にもう一度答えました。

「それは幸福になるためです。」

「それならよくわかります。」

突如として目が開けた思いがしました。このとき私は、それまでの3年弱の教会員生活で目にしていながら見すごし、とらえることのできなかった真理を悟ったように思いました。福音とは、喜び楽しむことであると……。

この経験は私のその後の伝道生活にはもちろん、解任された今も強い影響を与え続けています。専任宣教師としての生活で、また自分の家庭や世の中で、あるいは教会においていろいろな問題に直面し、悩み苦しむことがあります。しかしどのような困難も、福音を実践するとき、すなわちよきおとずれを喜び楽しむことによって克服できるのです。

私はいつも、「こんなに楽しいものがこの世にあるんだよ」という思いを態度や行ないに表わせるように努力しています。かのアルマが「私は嬉しくてたまらないので、霊が肉体から離れるかと思うほど夢中に楽しい」(アルマ29:16)と語ったように、これからも福音を学ぶことがどんなに楽しいものであるかを、人々に伝えていきたいと思っています。(けしの・まさみ 1960年生まれ、元札幌伝道部専任宣教師)

◎初等協会のCTRコースBで学ぶ町田ステーキ部町田第2ワード部の中里岳くん(8歳)。「大きくなったら宣教師になりたいです。『モルモンけいものがたり』は読みました。いまは毎日、モルモン経を家族といっしょに読んでいます。」



ポクが大きくなったら。。。

ス

ベンサー・W・キンボール大管長は今から37年前、「世の中に宣教師の業に匹敵するほどのものはありません」と述べました。この言葉は、今日の教会員の胸にもこだましています。

「家や橋などを築くことは重要ではありません。この世に属するものを造るのは、皆さんが行なっている人生を築く業に比べたら取るに足らないものなのです。」キンボール大管長は、1947年に行なわれたレーマン人の大会でそのように語っています。

また後に、犠牲を伴うものである伝道の業に備えるには、清く価値ある人生を送り、福音に対する知識と証を深め、資金をたくわえなければならないことを明らかにしています。

両親に向けてはこう語っています。「息子さんに伝道に出してほしいなら、必ず宣教師のために祈るように指導してください。子供は自分が一生懸命祈っている人たちに対して特別な気持ちを抱くようになるはずです。」

◎「初等協会の『開拓者11コース』で勉強しています。先週、監督さんの面接を受けアロン神権の執事に按手聖任されました。将来伝道に出たいと思います。なぜって、それを神さまが喜ばれるから……。モルモン経は家族と毎晩読んでいます。」(町田ステーキ部町田第1ワード部・鈴木義雄・12歳)

▶佐藤博省監督と鈴木義雄くん





◀7月に召されたJMTC第63期生
33名

▼木戸俊彦長老(左)



▼小川周一郎ご夫妻

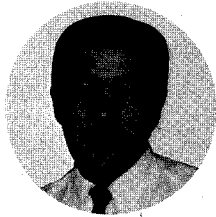
◎「6月にJMTCでの研修を終え、東京北伝道部に赴任して2カ月になります。私が伝道に出るうえで大きな動機づけとなったのは、教会の責任（青少年アドバイザー、ステーキ部宣教師）を活発に果たしたことと、セミナーの教師であった帰還宣教師から多くのことを学んだことです。」（東京北伝道部専任宣教師・木戸俊彦）

◎「私たちは共に昨年3月まで仙台伝道部で専任宣教師として働きました。解任されてからは伝道生活とのギャップに悩み、苦しい時もありましたが、毎週神殿に参入することによって導きを受けました。恵まれてよい伴侶と巡り会い、神殿結婚することができ感謝しています。伝道は神様からの贈り物であると思います。その贈り物が多くの兄弟姉妹たちと与えられるようにと願っています。」（横浜ステーキ部川崎ワード部・小川周一郎）



◎「伝道に出る前に4年間、セミナーの全コースを学び、インスティテュートでは『福音を分かち合う』のコースを帰還宣教師である教師から教わりました。すばらしい教師のレッスンから強い証を受け、伝道に出たいと思いました。」（名古屋伝道部専任宣教師・鈴木直美）

◀伝道に出る前日、両親と買い物をする
鈴木直美姉妹



がんこな父が心を開いた日

—すべての戒めにはそれを為しとげるために
道が備えられている—

岡山伝道部専任宣教師 荒 利治

小 さな頃から長距離トラックの運転手になるのが夢だった私は、やっと思いが実現して運送会社に就職することができ、毎日楽しく仕事をしていました。その仕事の中で、赤津姉妹という伝道に出られる姉妹の引越し荷物を運ぶ機会がありました。彼女の模範を通して伝道に出たいという気持ちが湧きおこり、その気持ちは日々つもの一方で、いつか必ず伝道に出ようと思っていました。

しかしその伝道を阻むいくつかの問題があり、そのひとつが父の反対でした。父は町でも有名ながんこ者で、私が教会員になったときから伝道は絶対許さんと言われてきました。もうひとつの問題は、父の会社のことです。父は建設会社を経営しており、私が会社の後継者になるのを強く望んでいるのです。そのために父から父の会社に入るように何度も説得を受けていました。しかし父の会社に入ったなら伝道には絶対出れなくなると思い、説得を2年近く断わり続けてきました。

しかし去年の9月、待ちきれなくなった父は私の住んでいるアパートを訪ねて来て、ひとつの条件を出してきました。それは、3年の間にどんな仕事でも成功を取めたならずっとその仕事をしてもいいが、もし失敗したなら私の所で働きなさいというのです。伝道のことを言い出すのは今だと思いましたが、言おうか言まいか迷っていました。

その頃、隣のアパートに阿部さんという自分

のダンプカーで商売をしているご家族が住んでいて、いつも私に親切にしてくれていました。

ある日、阿部さんが私の部屋へ訪ねて来て、「荒くん、11トンのダンプを買って自分で商売をする気はないか」と私に仕事を持ちかけてきました。

仕事の内容を聞いてみたところ、とてもいい仕事でもうけも大きく、一生続けていけそうでした。自分のトラックを持つのが私の小さい頃からの夢でしたので、すぐにその話に乗りました。もしこの仕事で成功すれば、父もきっと許してくれると思ったのです。

しかしその反面、伝道はどうなるのだろうと一抹の不安がありました。ダンプカーが買えるという喜びでその気持ちを打ち消してしまいました。

ダンプカーを買うために車を選んだり頭金を集めたりして、準備は着々と進みました。そしてあと何日かでダンプカーが手に入るというときです。スピード超過でつかまり、1カ月の免許停止処分を受けてしまったのです。

この一件から、神様は私に何かを語りかけているのではないかと思いました。「ああ、ダンプカーを買うのが1カ月延びちゃったな。まあ自分の不注意だから仕方ないか。……でも神様は何を言おうとしておられるのだろう。あ、伝道だ。神様は伝道を望んでおられるんだ。」そのとき、神様の望んでおられること、すなわち伝道から心が離れていた自分に気がつきました。「あ

あ、自分はなんて愚かでの世的な考えを持っていたんだろう。父との約束まであと2年ある。よし、伝道に出るぞ！」

このとき、私の決心は固まりました。父の反対などもう怖くはありません。なぜなら神様が導きを与えてくださるに違いないからです。もし親の反対を押し切って伝道に出たとしてもたったの1年半であり、また永遠の見地から見れば、両親にとっても価値のある大切なことからです。反対されることを承知のうえで、両親のもとに話しに行きました。

父には来客がありましたので、まず母に伝道のことを話しました。最初は反対されましたが、「まあいいでしょう」という言葉がもらえました。

そして次は父です。お客さんが帰り、父が居間に来ました。そのとき父はあまり機嫌きげんが良くなかったので、この次にしようかと思いましたが、今話さないというみたまのささやきがありましたので思いきって伝道のことを話しました。

すると、「だめだとは言わない。言わないから、今すぐ家から出て行け！二度と帰って来るな」と今までにないほどに怒鳴られました。これ以上は話してもむだだと思い「おふくろ、すまん」という言葉を残しただけで家を出ました。予想はしていましたがやはりショックでした。たったの1年半とはいえ、親を捨てるというのは容易なことではありません。もしかすると一生家に入れてもらえないかもしれない……。しかし私は神様が家族を祝福して下さるという信仰を持っていました。その日、床につく前に「両親に祝福されて伝道に出ることができましように」という言葉を祈りの中に入れました。

次の日の朝、電話のベルで目が覚めました。時計を見たらまだ6時半。「あれ、きょうは非番

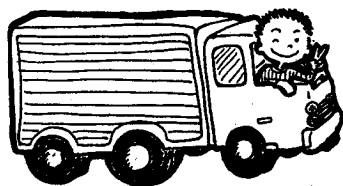
のはずだが……」と思いながら電話に出てみると、なんと父からでした。そして思いも寄らぬ言葉が返ってきました。「昨日は突然言われたのでついカッとなってしまったが、1年半でも3年でもいい、頑張ってこい。親つてもんはそう簡単に子供を捨てられるようなもんじゃない。」

そのとき私はあまりのうれしさに「ありがとうございます」としか言葉に出てきませんでした。奇跡でした。本当に奇跡でした。祈りが応えられたのです。主のみたまを父に注いでくださった神様に心から感謝しました。

免許停止の日も近づいてきたので勤めていた運送会社をやめ、別の仕事を捜していたところ父から再び電話があり、会社の方が忙しいので伝道に出るまで手伝うようにと言われました。私は心の中で「今だ」と叫びました。父に末日聖徒としての模範を示すときです。

それから伝道に出るまでの3カ月間、必死になって働きました。するとどうでしょう。あれほど堅かった父の性格がだんだんやわらかくなってくるではありませんか。母も「今までこんなこと一度もなかったよ」と言っていました。

さらに伝道に出る直前に、またまた奇跡が起りました。父が伝道に必要なものは全部買ってやると言うのです。今まで何も買ってくれたことのないあの父が……。そして数日後にひとつの封筒を取り出してこれをお前にやると言うのです。中には30万円ものお金が入っていました。



た。そのとき、父は本当に伝道のことを理解してくれたのだと知りました。

「私は主が命じたもうたことを行って行く。私は、主が命じたもうことには、人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり、それでなくては、主は何の命令も人に下したまわらないことを承知しているからである」(I ニーファイ 3 : 7) とニーファイが語ったように、すべての戒めにはそれを為しとげるための道が備えてあります。また真理は人を変え、家庭に真の幸福をもたらしてくれることを証します。

両親も、私が神様のみ業を行なうために協力し、犠牲を払ってくれました。このことによって暗かった私の家庭の中に光がとまり、家族の絆が強くなりました。こんなにたくさん神様から祝福をいただいて伝道に出ることができたので、今はただ全力で主のために働くだけです。そしていつか家族と共に教会に集える日を楽しみにしています。(あら・としはる 1963年生まれ、仙台ステーキ部塩釜支部出身)

完成した久留米支部 教会堂 一種がまかれて14年

福 岡市より南へ40キロのところの位置する久留米市は、福岡県において福岡市、北九州市に次ぐ人口21万人の第3番目の都市です。

この地に伝道が始まったのは1970年1月、ふたりの宣教師とひとりの会員によってです。それ以来出席者が増えるにつれて3つの借家やビルを移転し、今では登録会員170名を越えるようになりました。

この久留米支部は4年前までは支部長をはじめ神権役員のほとんどが独身者という特異な支部でしたが、独身者たちも次々に結婚し、5つの家族が誕生し、今では子供たちのにぎやかな声が聞かれるようになりました。

支部が安定するようになり、成長の足が早まるにつれ、教会堂建築の計画も現実のものとなってきました。聖餐会出席者数を増やし、建築資金をためるようにとのチャレンジが与えられました。

支部の兄弟姉妹は従順にチャレンジに^{こた}応えて、聖餐会出席者も最高118名という日もあり、小さなビルでの集会場に入りきれなかったことさえありました。

建築資金350万円の目標も兄弟姉妹の多大な献身的努力によってなんとか達成できました。そしてやっと念願の美しい教会堂が与えられ、そこに集える恩恵に浴することができるようになったのです。

立地条件にも恵まれ、国鉄久留米駅より徒歩10分、まわりには小中高校と3つの学校があり、これからの発展が期待されます。

現在ワード部を目指し、全員一致団結し、頑張っています。これまで支部を支えてくださった歴代の支部長および会員の^{みな}方々^もに心から感謝いたします。(久留米支部長・三牧敏行)

〈原稿を募集しています〉

- ローカルページに各地の身近な話題や行事、日々の信仰生活から得ている証など、原稿をお送りください。12月号掲載分の締切は10月8日(必着)です。投稿には必ず連絡先(電話番号)を記入してください。
- あて先：〒106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室。☎03-440-2351代

福岡ステーキ部久留米支部 1984年4月3日完成

福岡県久留米市城南町10-24 TEL 0942-32-0267



三牧敏行支部長

敷地面積：594.09㎡
建築面積：227.66㎡
延床面積：417.90㎡



